

篠原遺跡第40次発掘調査報告書

2021

神戸市

篠原遺跡第40次発掘調査報告書

2021

神戸市

本書は篠原遺跡における第40次となる発掘調査の成果報告書です。篠原遺跡では古くから土器が採集され、その存在が知られておりましたが、早くからの市街地化により遺跡は消滅したものと一度は考えられていました。昭和58年の調査により良好に遺跡が存在することが判明し、以来、今回で調査は40次を数えます。

篠原遺跡では縄文時代中期には人々が定住をはじめたと考えられる様子が判明しており、その後、縄文時代晩期、弥生時代後期には当地域の中心となる集落として発展したことが明らかになっています。今回の調査でも弥生時代後期後半の竪穴建物などが検出され、また建物からは銅鍬が出土し、拠点集落の一端を窺い知ることができました。さらには古代末～中世初頭頃の建物を検出し、資料の蓄積が図られました。

とはいえ、篠原遺跡の範囲は広く、一帯には未だ知られていない歴史的な情報が、良好な状態で地中に遺構・遺物として多く遺されているものと思われます。新たな発見に期待し、今回の発掘調査の成果が地域の歴史として活かされることを願っております。

2021年3月
神戸市文化スポーツ局

例 言

1. 本書は神戸市灘区篠原南町3丁目に所在する篠原遺跡における第40次となる埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、神戸市が株式会社日昌から委託を受け実施した。
3. 現地での調査は令和元年10月24日～12月27日の間で実施した。調査区の底地面積は270㎡で、遺構検出面の数を乗じたのべ調査面積は810㎡であった。令和2年度は神戸市西区の神戸市埋蔵文化財センターにおいて図面・写真ならびに出土遺物の整理、金属製品の保存処理などを行い、発掘調査報告書作成を行った。
4. 本事業に関する発掘調査及び遺物整理・報告書作成は下記の調査組織によって実施した。
神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当） 令和元年度（2019）・令和2年度（2020）

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館名誉館長
栗田 哲郎 京都府立大学教授

令和元年度 現地調査

令和2年度 遺物整理・報告書作成

教育委員会事務局

文化スポーツ局

教育長 長田 淳
教育次長 後藤 徹也
文化財課長 安田 滋
埋蔵文化財センター担当課長 前田 佳久
埋蔵文化財係長 東 喜代秀
担当係長 齋木 巖
◇ 松林 宏典
◇ 中村 大介
事務担当学芸員 阿部 敬生
調査担当学芸員 藤井 太郎
◇ 加納 大登
遺物整理・保存科学担当学芸員 山田 佑生

局長 岡田 健二
副局長 宮道 成彦
文化財課長 安田 滋
埋蔵文化財センター担当課長 前田 佳久
埋蔵文化財係長 東 喜代秀
担当係長 齋木 巖
◇ 松林 宏典
◇ 中村 大介
事務担当学芸員 小林 さやか
遺物整理・保存科学担当学芸員 山田 佑生
報告書作成担当学芸員 藤井 太郎
◇ 加納 大登

5. 本書の執筆については藤井が行った。出土遺物の図化については金属製品は保存科学担当山田佑生が行い、それ以外は調査担当者が行った。
6. 現地での遺構、遺物出土状況などの写真撮影は調査担当者が行った。出土遺物の写真撮影については杉本和樹氏（西大寺フォト）に委託して実施した。
7. 本書に記載した遺跡、調査地の位置図は、神戸市発行の2,500分の1地形図「石屋川」「六甲」及び神戸市発行の「神戸市埋蔵文化財分布図」を使用した。
8. 本書に使用した方位・座標は世界測地系第V系座標で、標高は東京湾平均海面（T.P.）で表示した。
9. 発掘調査の実施、整理作業及び本書の刊行に際しては、事業主である株式会社日昌に多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

目 次

序文

例言

目次

第1章 調査の概要	1
第1節 はじめに	1
第2節 篠原遺跡と周辺の歴史環境	3
第3節 篠原遺跡における既往の調査	4
第2章 発掘調査の成果	6
第1節 調査の概要	6
第2節 検出遺構と出土遺物	8
(1) 第1遺構面(古代末～中世)	8
(2) 第2遺構面(弥生時代後期・縄文時代晩期)	19
(3) 第3遺構面	29
(4) その他の出土遺物	29
第3章 まとめ	34
第1節 今回の調査成果について	34
第2節 篠原遺跡での既往調査の成果	35
(1) 篠原遺跡の時代別検出遺構・遺物の分布状況	35
(2) 篠原遺跡における竪穴建物の検出について	37
(3) 都賀川流域の遺跡(篠原遺跡と都賀遺跡・伯母野山遺跡)	39
第3節 最後に	42

写真図版

報告書抄録

図 版 目 次

第1図	藤原遺跡位置図	1	第21図	2区北壁土層図	30
第2図	藤原遺跡と周辺の遺跡	2	第22図	SB201平・断面図及びSX205・SK208断面図	21
第3図	既往調査地位置図	4	第23図	【写真】SB201-SF201 断り割り根石検出状況	21
第4図	【写真】調査作業風景	6	第24図	SB201出土遺物(1)	22
第5図	調査区別図及び断面図位置図	6	第25図	SB201出土遺物(2)	24
第6図	調査区断面図	7	第26図	SD201出土遺物	25
第7図	第1遺構面平面図	8	第27図	SD201平面図及び断面図	26
第8図	SB101平・断面図	9	第28図	SK202平・断面図及び出土遺物	27
第9図	SB101-SF101遺物出土状況及びSB101出土遺物	10	第29図	SK205平・断面図及び出土遺物	28
第10図	SD103・104及び周辺遺構平・断面図	11	第30図	旧耕土層・遺物包含層・盛土層出土遺物	30
第11図	SD103出土遺物	11	第31図	出土石器	31
第12図	SD104(東)遺物出土状況及びSD104出土遺物	12	第32図	出土鉄製品	32
第13図	SX102及び周辺遺構平面図	13	第33図	出土銅鐵	33
第14図	SX102・SD104断面図	14	第34図	市内銅鐵出土遺跡位置図	33
第15図	SX102・104・105出土遺物	14	第35図	時代別遺構・遺物検出調査地分布図	36
第16図	SX101平面図	15	第36図	藤原遺跡検出(弥生時代) 竪穴建物(1)	37
第17図	SX101(プラン別)平・断面図	16	第37図	藤原遺跡検出(弥生時代) 竪穴建物(2)	38
第18図	SX101出土遺物	16	第38図	都賀遺跡方形周溝墓・竪穴建物検出状況	39
第19図	SK104平・断面図及び出土遺物	17	第39図	【写真】藤原遺跡出土金属器	40
第20図	第2遺構面平面図	19	第40図	都賀川流域遺跡位置図	40

表 目 次

第1表	既往調査一覧	5	第4表	神戸市内銅鐵出土遺跡一覧	33
第2表	出土石器一覧	31	第5表	遺跡消長表	41
第3表	出土鉄製品一覧	32			

カラー写真図版目次

図版1	1. 調査地遠景(摩耶山展望台より)	図版2	1. SB201調査作業風景(南西から)
	2. 調査地遠景(瀧丸山公園より)		2. SB201出土銅鐵

写真図版目次

図版1	1区第1遺構面全景(南から)	図版17	1. SB201銅鐵出土状況(北西から)
図版2	1. 2区第1遺構面北半全景(南西から)		2. SB201銅鐵出土状況近景(北西から)
	2. SB101検出状況(南から)	図版18	1. SB201-SX203土層断面(東から)
図版3	1. SB101-SF101遺物出土状況(北から)		2. SB201下層方形プラン全景(南から)
	2. SB101-SF101断面及び遺物出土状況	図版19	1. SK202及びPt236全景(北から)
図版4	1. SD104及びSX102・104・105全景(西から)		2. SK205遺物出土状況(南東から)
	2. SD104及びSX102・104・105全景(東から)	図版20	1. SB101出土遺物
図版5	1. SD104遺物出土状況(南から)		2. SB101・SX101出土遺物
	2. SD104及びSX102遺物出土状況(南から)		3. SD103出土遺物
図版6	1. SD103土層断面及び遺物出土状況(南から)	図版21	1. SD104(東)出土遺物
	2. SD103遺物出土状況(南東から)		2. SD104(西)出土遺物
図版7	1. SD104(東)土層断面及び遺物出土状況(西から)	図版22	1. SD103出土遺物
	2. SD104(東)遺物出土状況近景(南から)		2. SD104出土遺物
図版8	1. SX101検出状況及び調査区中央土層断面(南西から)		3. SX102・104・105出土遺物
	2. SX101-01・02検出状況(南東から)		4. SK104出土遺物
図版9	1. SX101-03~07全景(北から)	図版23	SB201出土遺物(1)
	2. SX101-08~10全景(南東から)	図版24	SB201出土遺物(2)
図版10	1. SK101土層断面(南から)	図版25	1. SB201出土遺物(3)
	2. SX104全景(南東から)		2. SD201出土遺物
	3. SK104南半全景(南から)		3. SK202出土遺物
図版11	1区第2遺構面全景(南から)		4. SK205出土遺物
図版12	1. SD201南辺土層断面(東から)	図版26	1. その他の出土遺物(古代~中世)
	2. SD201南辺中央溝底土坑状部全景(南西から)		2. その他の出土遺物(弥生時代)
図版13	1. SD201東辺北端部全景(南から)		3. その他の出土遺物(縄文時代)
	2. SX202全景(南から)		4. 出土石器
図版14	1. 2区第2遺構面全景(南西から)	図版27	1. 出土銅鐵
	2. SB201調査作業風景(南東から)		2. 同X線写真
図版15	1. SB201高床部遺物出土状況(南西から)		3. 出土鉄製品
	2. SB201盛土層土器片及び小礫集中部検出状況(南西から)		4. 同X線写真
図版16	1. SB201南西角部遺物出土状況(南東から)		
	2. SB201南辺SX205・SK208検出状況(北東から)		

第1章 調査の概要

第1節 はじめに

篠原遺跡は、六甲川と柚谷川が合流し、都賀川となる合流地点の北東に形成された扇状地及び北側の下位段丘上に立地している。遺跡の範囲は東西が現在の阪急六甲駅の西側から柚谷川までの約500m、南北は阪急神戸線を挟み、北側に600m、南側に150mの約750mの範囲に及ぶものと推定されている。標高は低位45m、高位85mの範囲である。

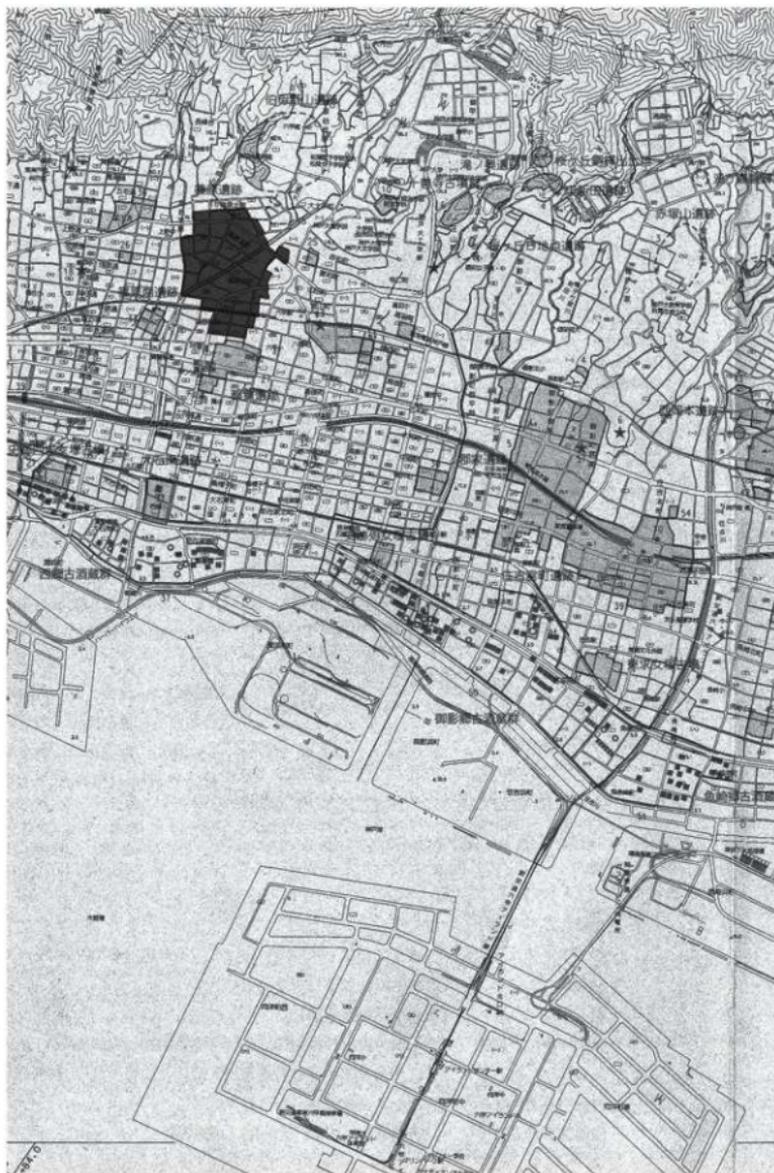
古くは昭和4年に小林行雄氏により周辺で採集された弥生土器が学術雑誌で紹介されて以来、篠原遺跡の名称は考古学界で著名であったが、早くからの市街地化により遺跡はほとんど消滅したものと考えられていた。ところが、昭和58年度の共同住宅建設に伴う発掘調査で遺構・遺物が良好に残っていることが確認され、以降、今回が篠原遺跡における40次目の発掘調査となる。これまでの調査で縄文時代から中世に至る複合遺跡であることが判明している。

集落の盛期は大きく分けると2時期あり、1つ目は縄文時代後期～晩期である。昭和58年度の第2次調査では縄文時代晩期中頃の東北地方の大洞式土器や注口土器、遮光器土偶などが出土し、広域な交流があったことが窺える。石器製作関連の遺構なども検出され、この時期には拠点集落として機能していたと考えられる。この調査で出土した土器を整理した家根祥多氏により縄文時代晩期中葉の土器編年が再編され、篠原遺跡を標式遺跡とする「篠原式土器」の土器型式が提唱されている。

2つ目は弥生時代後期後半～終末期にかけてで、調査で検出される遺構、遺物の大半を占める。平成7年度の第12次調査では弥生時代後期後半の遺物を多く含む大溝から小型仿製鏡（乳文鏡）が出土しており、このほかの調査でも磨製石剣や鉄鏃、他地域からの搬入土器が出土している。検出遺構、大量の遺物の出土、多様な出土品と集落域の想定を合わせて拠点集落としての位置付けがなされている。



第1図 篠原遺跡位置図 (Scale 1:400,000)



第2図 篠原遺跡と周辺の遺跡 (Scale 1 : 30,000)

第2節 篠原遺跡と周辺の歴史環境

篠原遺跡の立地する都賀川水系から東側の住吉川水系付近までの遺跡を概観する。

旧石器時代には桜ヶ丘遺跡B地点でナイフ形石器が出土している。

縄文時代には滝ノ奥遺跡で草創期の複数の有茎尖頭器、押型文土器など早期の土器の出土が知られる。篠原遺跡の南に隣接する都賀遺跡からは早期後葉の高山寺式土器が出土しており、西岡本遺跡では同時期の竪穴建物が検出されている。申新田遺跡では前期のものと考えられる石鏃や球状耳飾りが出土したとされており、石屋川水系～都賀川流域の丘陵部から扇状地上に活動領域の拡がりが見込まれている。篠原遺跡では中期の土器の出土とともに竪穴建物が確認され、後期に継続、晩期に盛行する。亀ヶ岡系土器の出土など広域交流の様子が窺える。

弥生時代は、前期は篠原遺跡では自然河道が検出されている程度である。中期になると篠原遺跡では土器の出土と遺構が確認されるが、その数は少ない。南側の都賀遺跡では中期後半の方形周溝墓が検出されている。中期には大阪湾を望む六甲山系の丘陵上に高地性集落が営まれる。伯母野山遺跡、桜ヶ丘B遺跡、荒神山遺跡、赤塚山遺跡など後期まで継続して営まれるものが多い。高地性集落に近接して青銅器の埋納が多く確認されており、銅鐸14口、銅戈7口が発見された桜ヶ丘銅鐸・銅戈出土地や渦ヶ森銅鐸出土地などがある。さらに平野部の本山遺跡、北青木遺跡からも銅鐸の出土が知られる。本山遺跡は弥生時代の近畿地方での最古級となる土器と木製農具の出土で著名であり、後期まで継続する。都賀川水系では後期には篠原遺跡が拠点集落の一つとなり、住吉川水系では郡家遺跡で多くの遺構・遺物が検出されている。篠原遺跡近隣では八幡遺跡、都賀遺跡では竪穴建物が確認されている。

古墳時代には弥生時代から継続する下位段丘、扇状地上に立地する集落が前期まで営まれる傾向にある。沿岸部には西求女塚古墳、処女塚古墳、東求女塚古墳が築造される。中期から後期にかけては住吉川水系、住吉宮町遺跡で大規模な古墳群が形成され、同水系上流部の西岡本遺跡、岡本梅林古墳群、石屋川水系の十善寺古墳群などの古墳群が山麓から平野部にかけて築造される。篠原遺跡の西側には7世紀初頭の築造とされる横穴式石室の鬼塚古墳が現存する。

古墳時代から奈良時代にかけては住吉宮町遺跡や郡家遺跡で掘立柱建物など多くの遺構が検出される。さらに海岸部、古代山陽道の駅家「蘆屋驛」と推定される深江北町遺跡が著名である。篠原遺跡でも平安時代に入ると再び集落が形成されるようだが、現状その規模は大きくはない。滝ノ奥遺跡での火葬墓や11面の和鏡が納められた経塚の検出が特筆される。鎌倉時代以降、神ノ木遺跡など扇状地下位の遺跡のほか、八幡遺跡や五毛遺跡などの段丘高位で集落に伴う遺構・遺物が検出されている。荘園に関する文献史料や近世の絵図に描かれた小規模な村落配置より窺える景観が徐々に形成されたと考えられる。

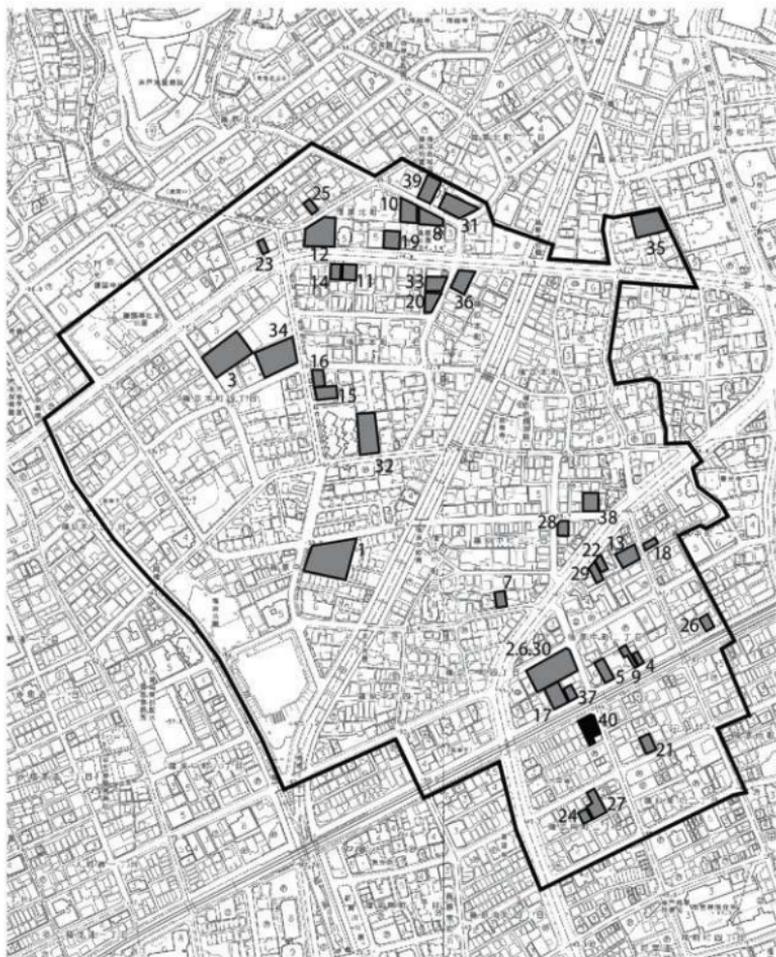
江戸時代中頃から明治時代にかけては海岸部で西郷古酒蔵群・御影郷古酒蔵群・魚崎郷古酒蔵群など酒造関連産業が発展していく。

参考文献

- 神戸市教育委員会
『縄文時代の神戸』2015 『神戸の弥生遺跡』2016 『神戸の古墳-I 前方後円墳-』2013 『神戸の古墳-II-』2017
神戸市『新修神戸市歴史編Ⅰ 自然・考古』1989 『新修神戸市歴史編Ⅱ 古代・中世』2010
『新修神戸市歴史編Ⅲ 近世』1992
財団法人古代学協会1984『神戸市灘区篠原A遺跡1』
妙見山麓遺跡調査会1989『神戸市灘区都賀遺跡1 神前地区の調査(1988年)』
神戸市教育委員会2004『西求女塚古墳発掘調査報告書』
神戸市教育委員会2020『郡家遺跡第95次発掘調査報告書』
神戸市教育委員会2010『住吉宮町遺跡第45次発掘調査報告書』
神戸市教育委員会2018『北青木遺跡第8次発掘調査報告書』
神戸市教育委員会2018『深江北町第17次発掘調査報告書』

第3節 篠原遺跡における既往の調査

これまで39回の調査により、縄文時代から中世にいたる遺跡であることが判明している（第3図及び第1表）。検出遺構・出土遺物からは縄文時代中期～晩期、弥生時代中期、弥生時代後期～終末期、平安時代末～鎌倉時代の各時期での集落形成の様子が窺える。ただ広大な遺跡の範囲の中で発掘調査に至る件数は少ない。開発の事前調査（試掘・確認調査）により状況が予測できる範囲はあるが、遺跡の内容については断片的なデータしか得られていない感がある。未だ不明な点が多いのが実状と思われる。



第3図 既往調査地位位置図 (Scale 1 : 5,000)

回数	調査年度	所在地	調査機関	調査面積 (底地)㎡	主な検出遺構・特記事項 (○◎括弧の時代文字、省略)	文献
1	昭和58年度(1983)	藤原中町5丁目	(財)古代学協会	700	縄文中期の 竪穴建物 ・土坑、縄文後期の土坑、弥生後期の 竪穴建物 ・溝 (藤原A遺跡)	藤原A 遺跡発掘調査報告書
2	昭和58年度(1983)	藤原中町2丁目	多湖俊博調査団	700	縄文時代、要館、大冢系土器・透光器土偶・石磚 弥生時代、 竪穴建物 、土器、石器・ 磨製石剣 (藤原B遺跡)	—
3	昭和62年度(1987)	藤原北町4丁目	神戸市教育委員会	220	弥生後期の 竪穴建物 ・土坑、古代～中世の遺物、近世の石材採掘場	昭和62年度埋蔵文化財年報
4	昭和63年度(1988)	藤原中町2丁目	神戸市教育委員会	36	弥生中期の土坑・溝	昭和63年度埋蔵文化財年報*
5	平成元年度(1989)	藤原中町2丁目	神戸市教育委員会	44	縄文・弥生・中世の遺物包含層、中世の礎石・柱穴・溝状遺構	平成元年度埋蔵文化財年報*
6	平成2年度(1990)	藤原中町2丁目	神戸市教育委員会	862	縄文後期の土器片、縄文晩期の土坑墓・集石遺構、 石磚 弥生後期の 竪穴建物 ・土坑、平安のビット (112第2次調査地 藤原B遺跡)	平成2年度埋蔵文化財年報
7	平成4年度(1992)	藤原中町3丁目	神戸市教育委員会	80	縄文晩期の土器、弥生後期の 竪穴建物 ・副立柱建物、落ち込み・ビット	平成4年度埋蔵文化財年報
8	平成4年度(1992)	藤原北町2丁目	神戸市教育委員会	220	弥生後期の 竪穴建物 ・土坑、落ち込み・ビット	平成4年度埋蔵文化財年報
9	平成6年度(1994)	藤原中町2丁目	神戸市教育委員会	72	弥生後期の土坑・溝、中世の土坑・溝	平成6年度埋蔵文化財年報*
10	平成6年度(1994)	藤原北町2丁目	神戸市教育委員会	80	弥生中期～後期の自然河道・土坑・ビット	平成6年度埋蔵文化財年報*
11	平成6年度(1994)	藤原北町3丁目	神戸市教育委員会	100	弥生後期の土坑・落ち込み・溝・ビット、中世の溝	平成6年度埋蔵文化財年報*
12	平成7年度(1995)	藤原北町2丁目	神戸市教育委員会	700	縄文後期の土坑、弥生後期の 竪穴建物 ・土坑・ビット、 小型仿製鏡 (乳文鏡・ベンガラ) 中世の 副立柱建物 、土坑、ビット	平成7年度埋蔵文化財年報
13	平成7年度(1995)	藤原中町2丁目	神戸市教育委員会	145	弥生後期～古墳初期の 竪穴建物 、土坑、溝、ビット	平成7年度埋蔵文化財年報
14	平成7年度(1995)	藤原北町3丁目	神戸市教育委員会	81	弥生後期の土坑、溝、落ち込み、柱穴、中世以降の耕作痕	平成7年度埋蔵文化財年報
15	平成7～8年度(1996)	藤原北町3丁目	神戸市教育委員会	160	弥生後期の 竪穴建物 ・溝状遺構・ビット	平成8年度埋蔵文化財年報
16	平成9年度(1997)	藤原北町3丁目	神戸市教育委員会	160	縄文晩期の溝・土坑、古墳時代以前の 竪穴建物 中、近世の土坑・溝・耕作痕	平成9年度埋蔵文化財年報
17	平成9～10年度(1998)	藤原中町2丁目	神戸市教育委員会	95	縄文晩期の土器片、弥生後期の 竪穴建物 、中世の土坑墓	平成9年度埋蔵文化財年報
18	平成10年度(1998)	藤原北町1丁目	神戸市教育委員会	30	弥生後期の溝、中世の土石流痕	平成10年度埋蔵文化財年報
19	平成10年度(1998)	藤原北町2丁目	神戸市教育委員会	220	弥生後期のビット・土坑・溝・ 磨製石剣 (破片)	平成10年度埋蔵文化財年報
20	平成11年度(1999)	藤原北町3丁目	神戸市教育委員会	100	検出遺構なし、客土より遺物	平成11年度埋蔵文化財年報*
21	平成12年度(2000)	藤原南町2丁目	神戸市教育委員会	98	弥生後期の遺物、 竪穴建物状遺構 ・溝 平安末～鎌倉初期の 副立柱建物 ・土坑	平成12年度埋蔵文化財年報
22	平成15年度(2003)	藤原中町2丁目	神戸市教育委員会	27	弥生後期～古墳初期の集石遺構・溝(環濠?)、中世の土坑・溝	平成15年度埋蔵文化財年報
23	平成15年度(2003)	藤原北町4丁目	神戸市教育委員会	12	時期不詳の耕作痕	平成15年度埋蔵文化財年報*
24	平成15年度(2003)	藤原南町3丁目	神戸市教育委員会	70	弥生後期～古墳初期の落ち込み? 遺物包含層?	平成15年度埋蔵文化財年報*
25	平成18年度(2006)	藤原北町3丁目	神戸市教育委員会	40	奈良の柱穴・土坑・溝	平成18年度埋蔵文化財年報
26	平成19年度(2007)	藤原北町1丁目	神戸市教育委員会	15	平安の溝・土坑・柱穴	平成19年度埋蔵文化財年報
27	平成20年度(2008)	藤原南町3丁目	神戸市教育委員会	200	弥生後期の 竪穴建物 、古墳後期の落ち込み・溝・礎石	平成20年度埋蔵文化財年報
28	平成21年度(2009)	藤原中町3丁目	神戸市教育委員会	120	弥生中期～後期の 竪穴建物 ・溝・土坑・柱穴、中・近世の耕作痕	平成21年度埋蔵文化財年報
29	平成21年度(2009)	藤原中町2丁目	神戸市教育委員会	108	弥生後期の 竪穴建物 、 鉄鏡 、中・近世の耕作痕	平成21年度埋蔵文化財年報
30	平成23年度(2011)	藤原中町2丁目	神戸市教育委員会	82	縄文遺物包含層、時期不詳のビット、落ち込み (第2次・第6次調査地)	平成23年度埋蔵文化財年報
31	平成24年度(2012)	藤原北町2丁目	神戸市教育委員会	650	弥生中期の 竪穴建物 ・溝・落ち込み・ビット、中世の土坑・ビット	平成24年度埋蔵文化財年報
32	平成25年度(2013)	藤原北町3丁目	神戸市教育委員会	350	弥生後期の 竪穴建物 ・土坑、弥生～中世のビット、手形形土器 (竪穴出土遺物7箱)	平成25年度埋蔵文化財年報
33	平成26年度(2014)	藤原北町3丁目	神戸市教育委員会	138	弥生後期の土坑・落ち込み・ビット、弥生後期の遺物を多く含む 土石流堆積	平成26年度埋蔵文化財年報
34	平成27年度(2015)	藤原北町4丁目	神戸市教育委員会	213	弥生? 河川遺、中世のビット・土坑	平成27年度埋蔵文化財年報
35	平成27年度(2015)	藤原北町1丁目	神戸市教育委員会	55	弥生中期の土石流、弥生後期のビット・土坑、縄文後期の土器	平成27年度埋蔵文化財年報
36	平成28年度(2016)	藤原北町3丁目	神戸市教育委員会	230	弥生後期の土坑・落ち込み・ビット	平成28年度埋蔵文化財年報
37	平成28年度(2016)	藤原中町2丁目	神戸市教育委員会	60	縄文晩期の要館墓、弥生後期の 竪穴建物 ・土坑 平安末～鎌倉初期の土坑・ビット	平成28年度埋蔵文化財年報
38	平成29年度(2017)	藤原中町3丁目	神戸市教育委員会	55	弥生終末期 竪穴建物 ?、中～近世の土坑・ビット	平成29年度埋蔵文化財年報
39	平成29年度(2017)	藤原北町2丁目	神戸市教育委員会	95	弥生中期の土坑・落ち込み・ビット (副立柱建物、 竪穴建物)? 弥生後期～終末期の土坑・ビット、平安～鎌倉時代の土坑・ビット	平成29年度埋蔵文化財年報
40	令和元年度(2019)	藤原南町3丁目	神戸市教育委員会	270	縄文晩期の土坑、弥生後期の 竪穴建物 ・土坑・溝(環濠?)・ ビット 平安末～鎌倉初期の副立柱建物・土坑・集石遺構・溝・ビット	本書

*一覧表のみ掲載 実測報告書

第1表 既往調査一覧

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うものである。調査地は六甲川と柚谷川の合流地点の東約300mに位置し、現標高55.0～56.0m付近の扇状地上に立地する。調査では3面の遺構面を確認し、縄文時代晩期、弥生時代後期後半～終末期（庄内式並行期）、平安時代末～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。

第1遺構面で平安時代末～鎌倉時代初頭頃の掘立柱建物、溝、集石遺構、土坑、柱穴を検出し、第2遺構面では弥生時代後期後半～終末期と考えられる竪穴建物や方形周溝墓の可能性のある溝、縄文時代晩期の土坑などを検出した。第3遺構面である地山面ではピットや落ち込みを検出したが、いずれも浅く規模は小さい。調査区の土層断面の観察からは第2遺構面に形成された遺構を第3面で検出したものも確認しており、第2遺構面では捉え切れなかった遺構を含むものと考えられる。

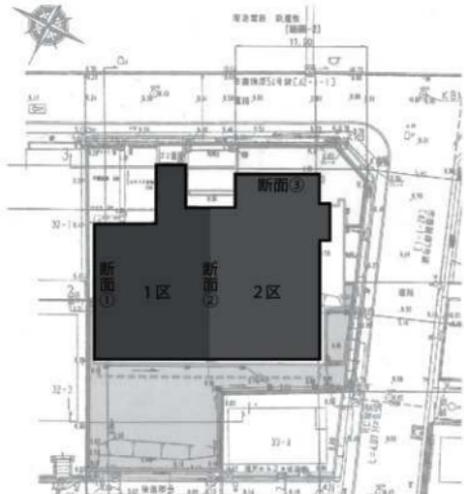
調査は残土置き場、作業スペースの確保の都合上、東西に2分割して実施した。西半を1区、東半を2区とし西半から東半の順に行った。中世の遺物包含層上面までを0.25バックハウスで掘削し、以下は人力により遺構検出、掘削作業を行い、記録作業を行った。

基本層序

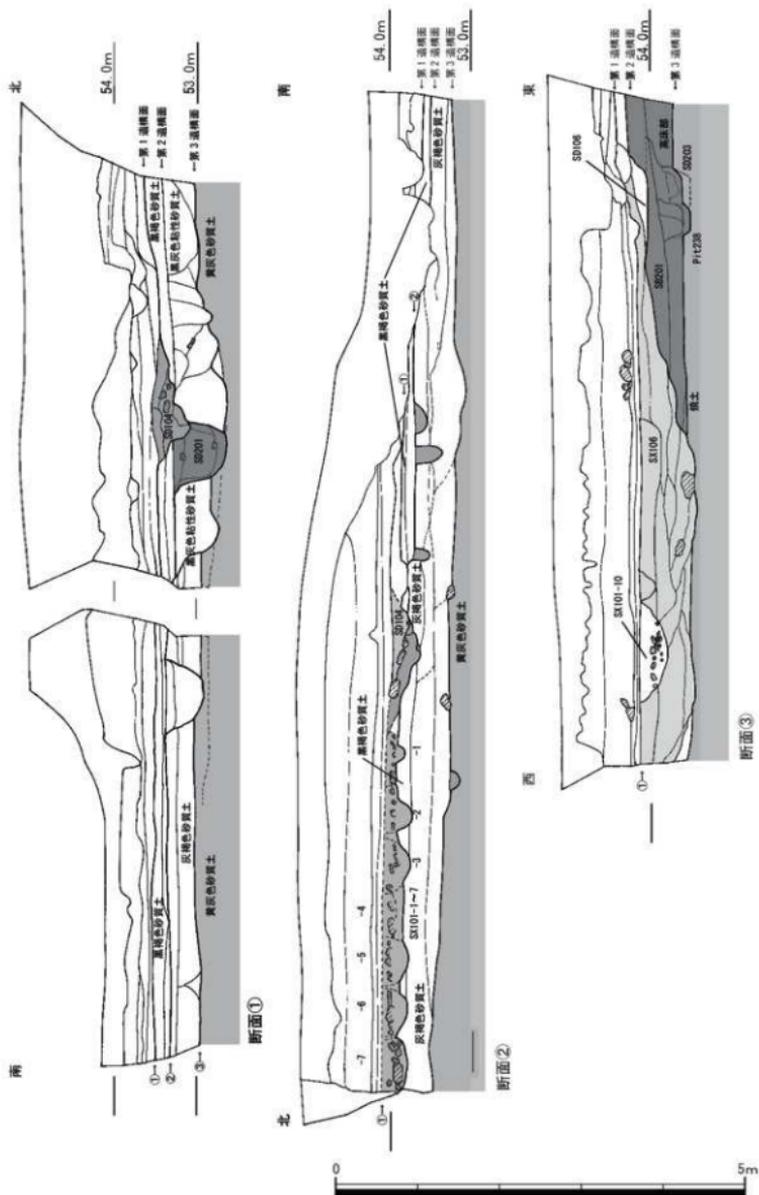
調査区内には上層より現代盛土、現代耕作土、近世耕作土、中世耕作土、褐色粘質土（古代～中世遺物包含層）、暗灰褐色及び黒褐色砂質土（第1遺構面・弥生時代土壌化層・遺物包含層）、灰褐色砂質土（第2遺構面・弥生時代遺物包含層）が堆積し、黄灰色砂質土（第3遺構面ベース・地山面）面となる。第1遺構面の標高は北東部で54.3m、南西部で53.5mを測り、第2遺構面、第3遺構面はそれぞれ上層遺構面から約0.2mずつ下がり、調査地付近は大きくは南下がりの地形で、調査区内ではさらに東から西へ緩やかな傾斜地形を呈する。



第4図【写真】 調査作業風景



第5図 調査区割図及び断面図位置図

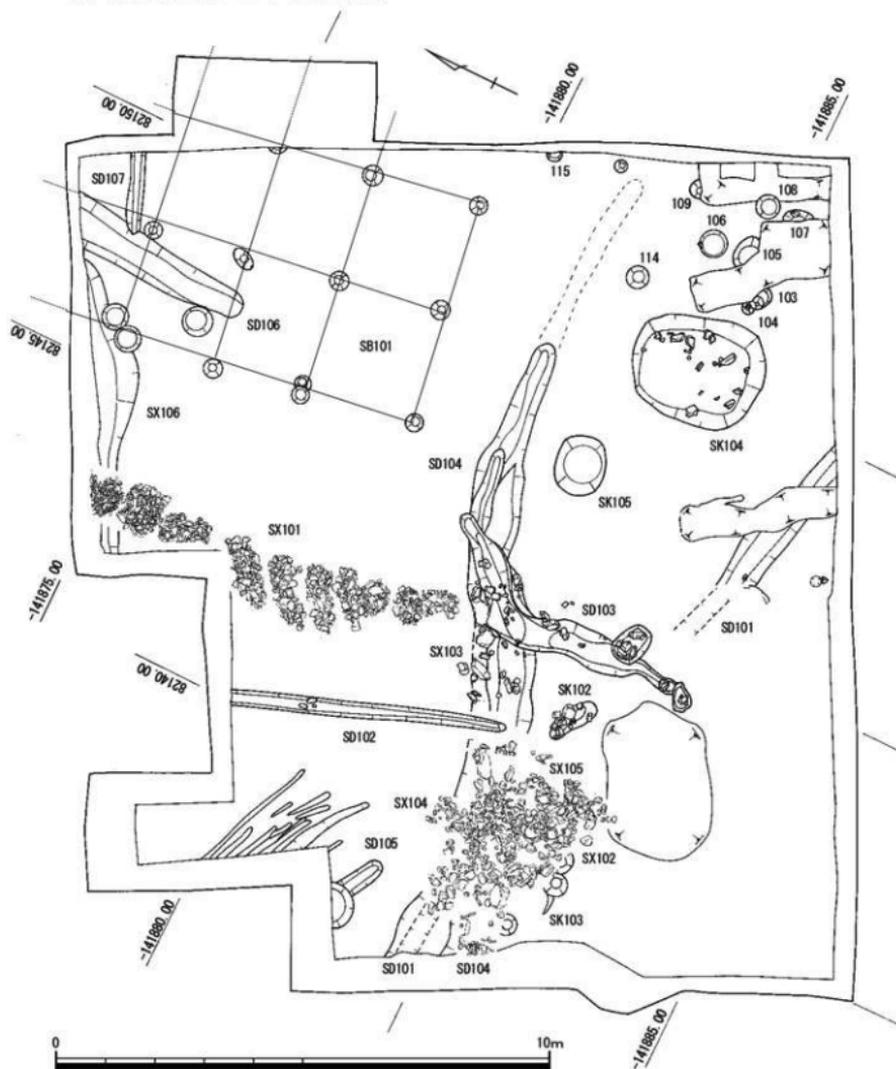


第6図 調査区断面図 (Scale 1:60) 断面①: 1区西壁 断面②: 1-2区境中央 断面③: 2区北壁

第2節 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面 (古代末~中世)

黒褐色砂質土上面で検出した遺構面である。掘立柱建物1棟、溝7条、集石遺構、土坑5基、落ち込み1基、ピットを検出した。

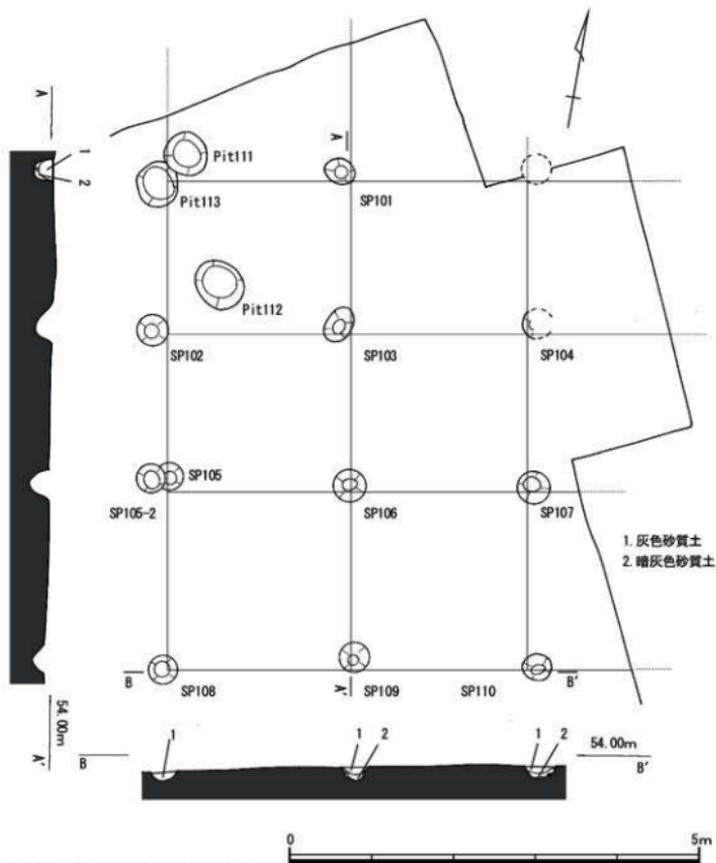


第7図 第1遺構面平面図 (Scale 1:100)

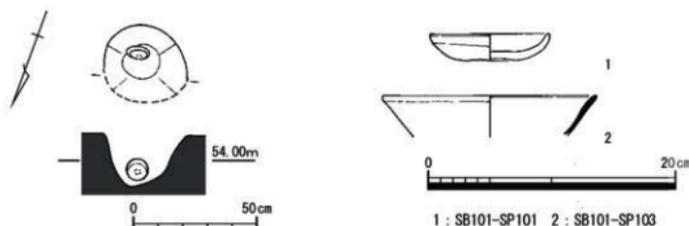
掘立柱建物SB101

調査地の北東部で検出した総柱の掘立柱建物である。主軸をN 10° Wに採る。径約0.4 m、深さ0.1～0.3 mの柱穴が柱間1.7 m～1.9 mで並ぶ。調査区内では南北3間、東西2間を検出したが、調査区外、北と東に続くものと考えられ、正確な規模は不明である。埋土はいずれも上層は灰色砂質土、下層に暗灰色粘質土が堆積する。北西側の柱穴はSX106とした落ち込みの影響などで判然としなかった。Pit113の柱痕と考えられた部分がSB101の柱穴に相当する可能性がある。

柱穴からの遺物の出土は少ないが、SP101では底近くで完形の土師器皿が出土したほか、SP103の上層からは須恵器碗の破片などが出土した。



第8図 SB101平・断面図 (Scale 1:60)



第9図 SB101-SP101遺物出土状況 (Scale 1:20) 及びSB101出土遺物 (Scale 1:4)

1はSP101から出土した土師器小皿で口径9.8cm、器高2.0cmである。口縁部に強いヨコナデを施す。2はSP103出土の須恵器甕で復元口径17.4cmである。

溝SD101

後述のSD104の上層に位置し、1区北西から南東に延びる。北東側からの下がり地形に沿って弧を描く。北西部では幅0.2m、深さ0.2mで明瞭な溝の形状を成すが、南東側は浅く広がりながら不明瞭になる。土壌の変色で溝の続きと判断した箇所がある。遺物はほとんどなく、墨痕のある須恵器片が出土し、これは下層SD104出土のものと接合した。SD104、SX102埋没後の耕地化の際の段落ちと考えられる。北側で検出したSD105も耕作に伴う痕跡であろう。

溝SD102

1区北半で検出した南北方向の溝である。検出長約3.0m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。南側は傾斜変換点であるSX02付近で不明瞭になる。小片の須恵器、土師器が出土した。

SD101・102・105・106・107は第1遺構面の上層に形成された耕作地での耕作痕の可能性があるが、時期など詳細は不明である。

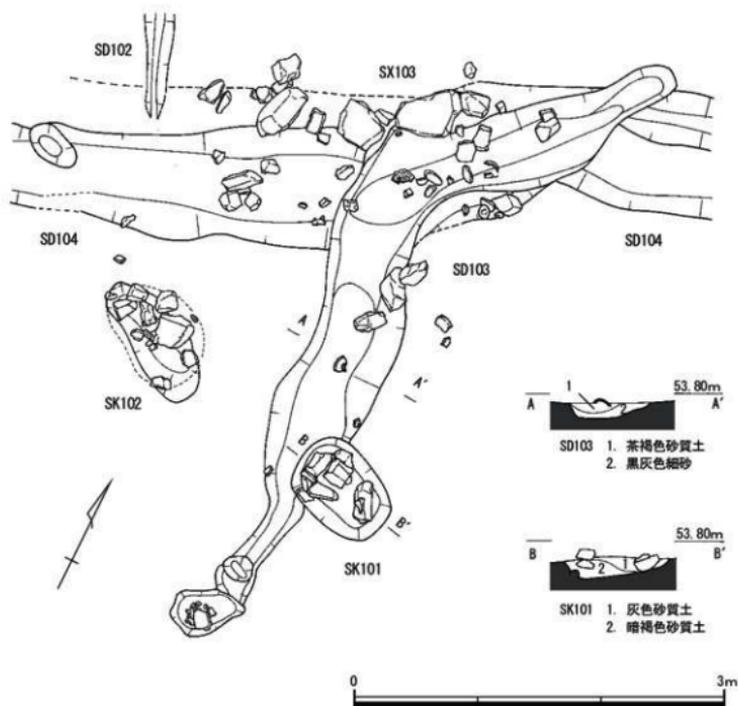
溝SD103

1・2区境南半で検出した南北方向の溝である。埋土は部分的に褐色細～粗砂を含む茶褐色砂質土である。粗砂の堆積はSD104に沿って東側に弧を描き、また西側のSX102の東側にも拡がる。これらの部分は砂で一時期に埋没したと考えられる。SD104と交差する箇所では一部、SD104の北肩から北側に砂が突き抜けて堆積する箇所がある。SB101からの排水溝の可能性も考えられる。遺物はSX103とした一辺60cmほどの石からなる石列の南側から完形の瓦器壺や土師器皿などが出土した。溝の南端はビット状になり、小礫が溜まっていた。

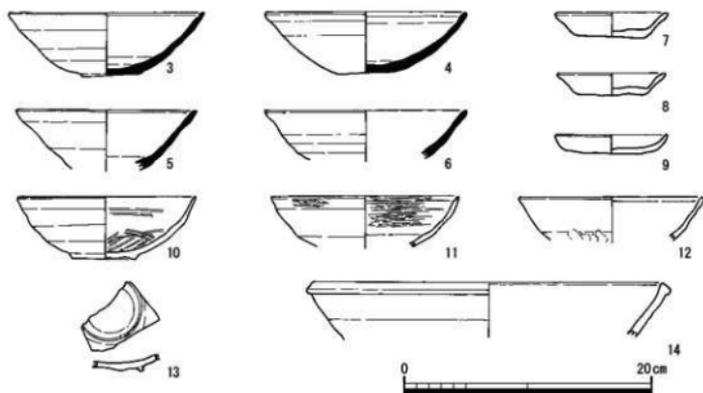
溝SD104

調査区中央で検出した東西方向の溝である。検出長は約13.0mで西側へさらに延びるものと考えられる。最大幅約2.0m、深さは西側が深く約0.6m、中央付近で約0.2m、調査区東端では浅くなり消滅するが、調査区東端まで痕跡と思われる土壌の変色が確認でき、建物SB101の南面までは延びていたと推測される。中央部分で上述の南に流れるSD103と重複し、最終的にはSD103が切り込むように砂が堆積していたが、それぞれの溝とした範囲から出土した土器片が接合するなど、SD103・104の最終的な埋没時期は同時期と考えられる。

遺物は溝の西半、今回検出範囲の西端の溝の最深部やSX102とした集石付近から完形の須恵器や土師質土器の壺、須恵器甕や土師器鍋の胴部片などが出土した。溝の東半からの遺物の出土は少なかったが、SD103と交差する東側で瓦器壺1点と土師器小皿5枚がまとまって出土した。北側のSB101側から流れ込んだか、意図的に投棄されたと考えられる。



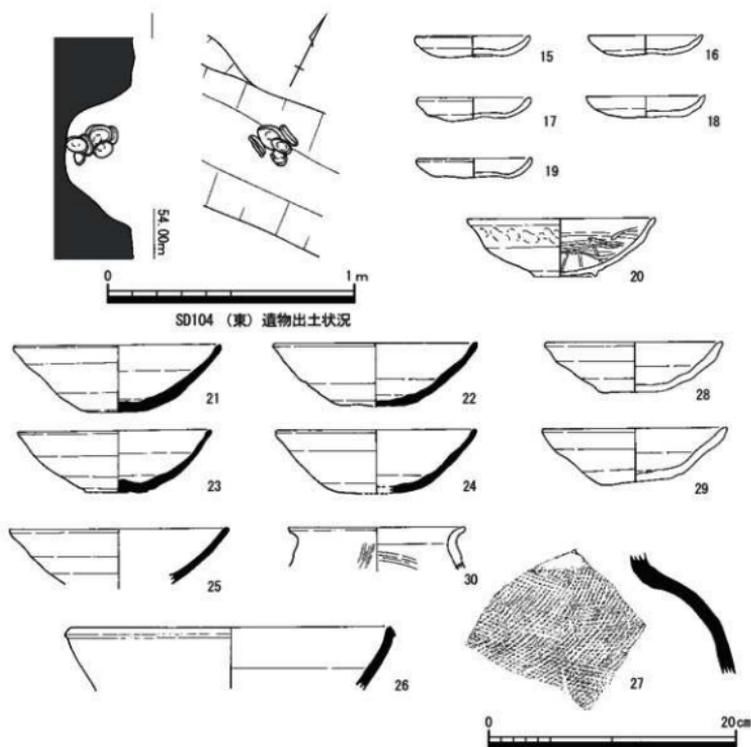
第10図 SD103・104及び周辺遺構平・断面図 (Scale 1:40)



第11図 SD103出土遺物 (Scale 1:4)

SD103出土の3～6の須恵器は口径16.0cm、器高5.0cm前後で、わずかに内湾する体部が上方に伸び、口縁部を肥厚させる。底部は糸切りで、3のみわずかに平高台が残るが、ほかは丸みを帯びた平底である。7～9は土師器皿で口径9.0cm、器高1.6～2.0cm、9のみ丸味を帯びた体部である。10～13は瓦器壙で10は内面に、11は内外面に細かいミガキ痕が確認できる。10・13の底部高台はわずかに逆台形状を残す。14は口径28.0cmほどの瓦質土器の鉢で口縁端部は外側に面をもつ。

15～20はSD104の東半で一括出土した土器群である。土師器皿15～19は口径9.5cm、器高1.8cm前後で、口縁部は一段のナデ成形である。20は瓦器壙で口径15.2cm、器高4.7cm、内面のミガキ痕が明瞭である。21以降はSD104西半からの出土土器である。21～25は須恵器壙で口径15.5～18.0cm、器高5.0cm前後を測る。体部は外上方に直線的に伸びる。28・29は土師質土器の壙で、口径15.0cm、器高4.5cmほどである。焼成が甘く、器壁表面の調整などは不明であるが、器形は同じくSD104から出土した須恵器壙に似る。ほかに須恵器鉢26、甕胴部片27、土師器の小型甕30などが出土した。完形の状態で出土する土器があるものの、西半から出土した土器は破片のものも多かった。

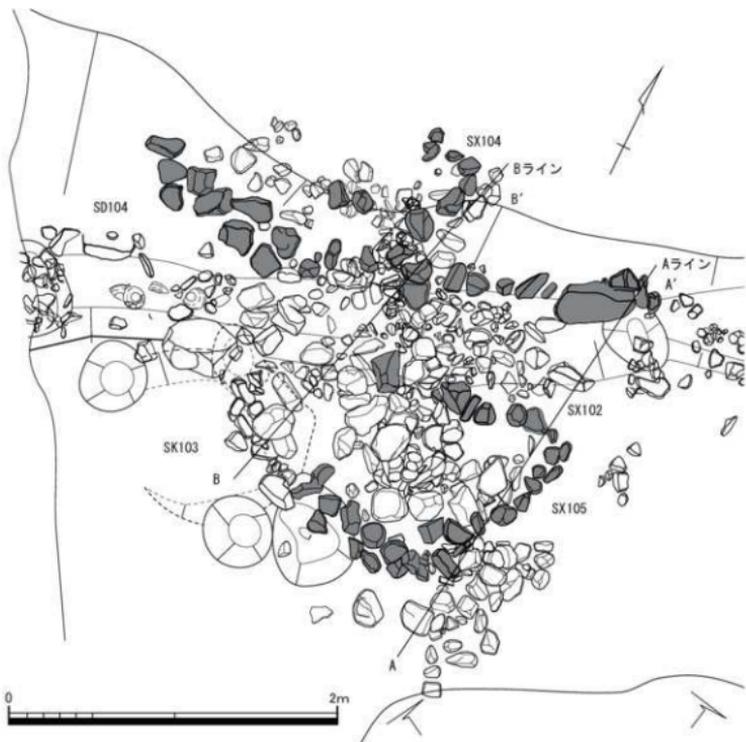


第12図 SD104(東)遺物出土状況 (Scale 1:20) 及びSD104出土遺物 (Scale 1:4)

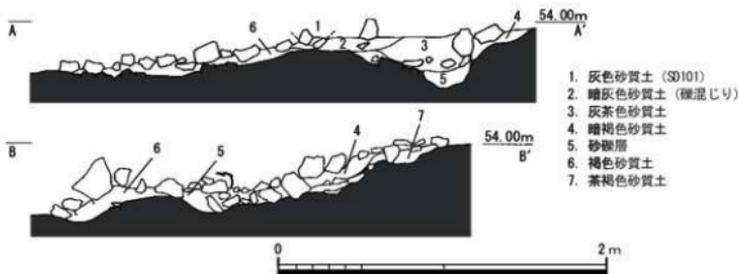
集石・石列SX102～105

SD104の西半、SD103以西の下がり地形の部分から拳大から人頭大の多量の石が出土した。この転石状のものをSX102とした。SD104と重複する部分から遺物が出土するが、南側や上層に広がる石の中からの遺物の出土は少ない。石を取り除くとSD104の輪郭が明瞭となり、SX102はSD104へ石を投棄した跡と捉えられる。SX102の下層でSD104を挟み、遺構面にわずかに食い込み状態の石組みを2箇所検出した。北側のものをSX104、南側のものをSX105とした。SX104は東側を背とするコの字状に石が配され、東辺の長さは0.5mである。石組みの中から土師器の羽釜や鍋、須恵器甕の胴部片が出土した。南側のSX105は東西長0.5m、南北長1.0mの範囲が周囲よりわずかに高い壇状を呈する。周囲に拳大から人頭大の石が巡り、石の並びの周辺から土師器鍋や須恵器甕の胴部片が出土した。

SX103はSX101の南側で検出した石列で60cm大のやや大振りの石を含む3石が並ぶ。SX102の下層ではSD104の北辺に沿って緩やかに弧を描く石列を検出した。SX104・105とともにこれらの石列には明確な掘形はなく、遺構面にやや食い込み状況であるが、土石流の堆積が露頭したものと考えるににくい。いずれも人為的に配されたものと想定している。



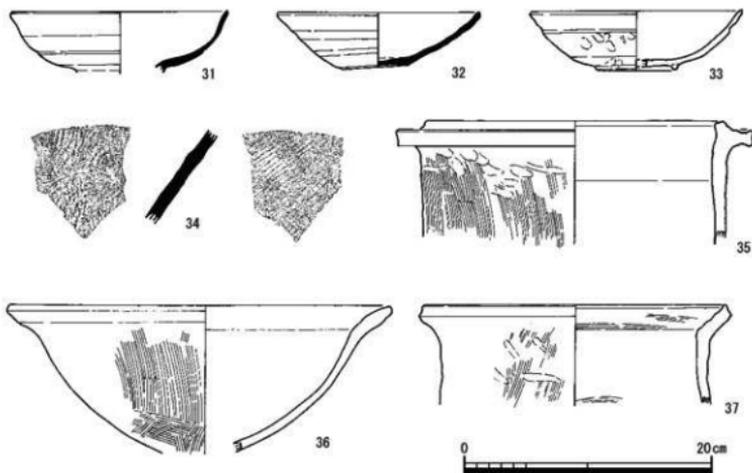
第13図 SX102及び周辺遺構平面図 (Scale 1:30)



第14図 SX102・SD104断面図 (Aライン+Bライン) (Scale 1:30)

SX02出土遺物の31・32の須恵器埴は口径16.5～17.5cm、器高5.0cmである。31の体部はやや内湾し、32は直線的に伸びる。33は瓦器埴で復元口径17.2cm、器高4.8cmである。口縁部は強いナデにより段をなす。SX104・105からは須恵器甕片、土師器の羽釜や鉢、鍋が出土した。35は土師器の羽釜で口径24.0cm、体部上半が残る。外面は細かいハケ調整が施される。36は大型の鉢で、外面上部はタテ方向、下部は不定方向のハケ、内面はナデ調整である。37はSX105出土の土師器鍋で復元口径25.0cm、残存高8.0cm、ハケによる調整を施す。

SD104、SX102出土の須恵器・土師器・瓦器埴などから段落ちの埋没時期はほとんど同時期と考えられるが、SX104・105出土の遺物はやや古相を示している。SD104の底でも円形に石が配される箇所が確認でき、SD103、SD104の埋没後に掘削されたSK101～103なども石を伴う土坑である。屋敷地の縁辺部と考えられる段の下への投石、石を伴う遺構の形成が繰り返し行われた場所と推測する。



第15図 SX102・104・105出土遺物 (Scale 1:4) 31～33: SX102 34～36: SX104 37: SX105

集石SX101 (01～10)

調査区中央北側、SB101の西側、SD104の北側で带状に延びる集石群を検出した。調査区内での検出長は南北約7.0mを測り、北側にさらに続くものと考えられる。集石は10基ほどの単位に分けられ、平面形は円形、方形、長方形の3種類に分類できる。集石の周囲と底に遺構面とはやや異なる土質の堆積が確認できるが、掘形であるのか周囲が土壌化したものかは判然としない。石を配した形状に明確に沿うものでなく、一様に丸みを帯びる。掘形の可能性のある変色部分の深さは検出面から0.1～0.2mで、比較的大きな石を据えた部分のみ深く、上面が平らな大きめの石を据えた後、周りを小さな石で補填する形態である。

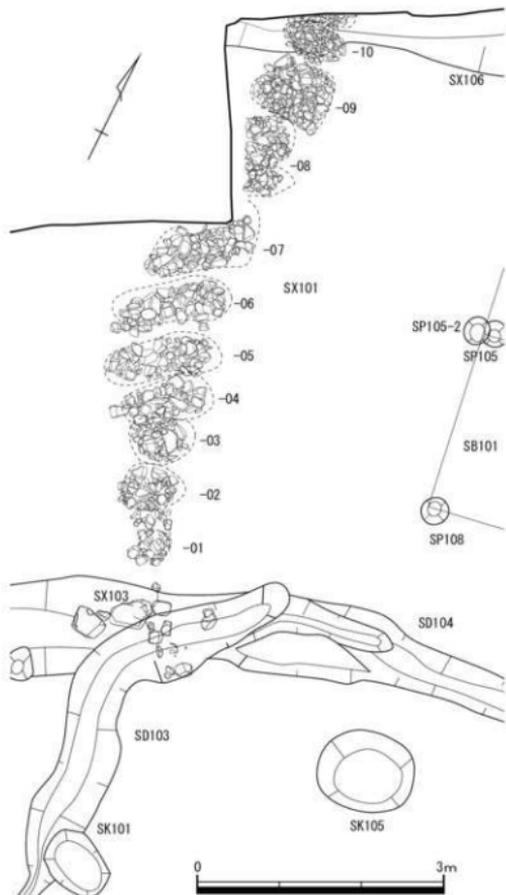
平面円形のSX101-01～03は01が径0.4mでやや規模が小さく、その他は径0.7mである。

平面長方形のSX101-04～07は長辺1.2～1.5m、短辺約0.5mで、04は平面長方形の05、平面円形の03と一部が重複し、後出するものの可能性がある。また04の周囲の変色部は長方形であるがやや丸みを帯び、石の配置から円形のもの2基が重なる可能性がある。

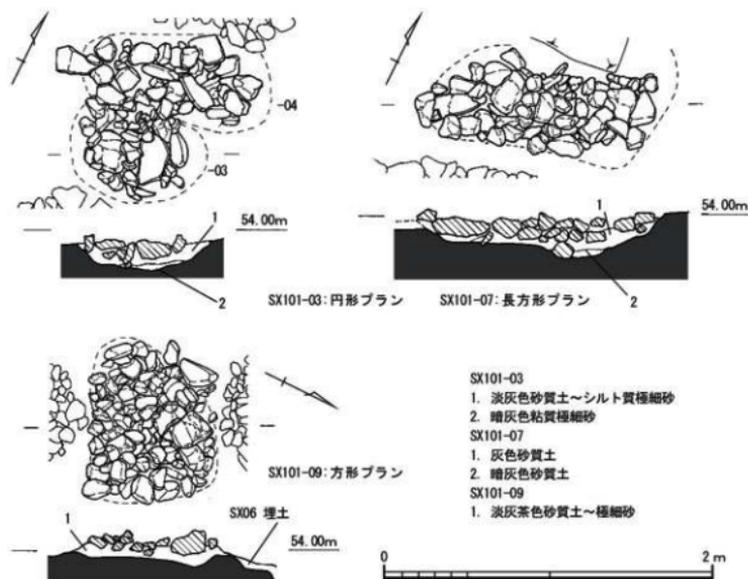
平面方形としたSX101-08～10は一辺の規模が0.7～1.0mである。09は規模が大きく、石の配置などに丁寧に作られた印象が窺える。08と10は当初、平面方形と判断したが、周囲の変色部から石の配置の細部をみた場合、ともに2基の円形の集石が合わさった可能性も想定される。

出土遺物は石の上面からわずかに須恵器壺や土師器鍋の破片、陶器甕の破片が出土した。

集石遺構の性格については形態から埋葬施設や火葬施設の可能性を想定したが、石に明確な被熱痕は認められず、周囲からも炭や骨片などの検出はなかった。下層で蔵骨器なども確認しておらず、現状で不明である。

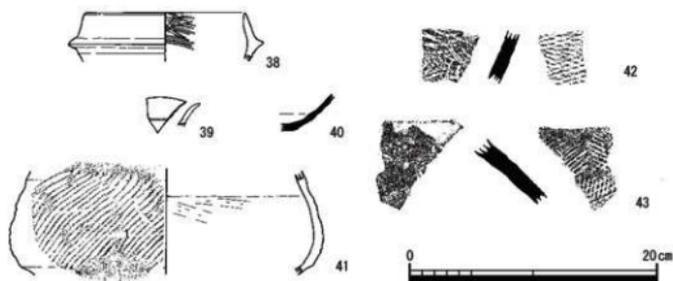


第16図 SX101平面図 (Scale 1:60)



第17図 SX101 (プラン別) 平・断面図 (Scale 1:30)

SX101からの出土遺物は、38が小型の瓦質土器の羽釜片で復元口径は17.0cmほどである。39は青磁皿の破片、40は須恵器碗の底部、41は土師器鍋の破片で外面はタタキ、内側はナデ成形である。42・43はSX101-05の石の隙間から出土した須恵器甕の体部片である。42は胴部、43は肩部と考えられる。外面は細かいタタキ痕である。遺物は石の上面やわずかに下がった石の隙間から出土しており、下部からの出土はほとんどなかった。上層に堆積する耕土層に伴う可能性も考えられる。出土遺物が乏しく、遺構の性格と合わせ不明な点は多い。



第18図 SX101 出土遺物 (Scale 1:4) 38・41: SX101-03 39・43: SX101-06 40: SX101-05 42: SX101-01

土坑SK101

SD103を切り込む長径1.0m、短径0.8mの平面楕円形を呈する土坑である。30cmほどの大きさの石が5個置かれ、須恵器片が出土した。

土坑SK102

掘形が判然としなかったが径1.0mほどの土坑状を呈すると考えられる。SK101と同様に30cm大の石が3石ほど伴う。遺物は出土していない。

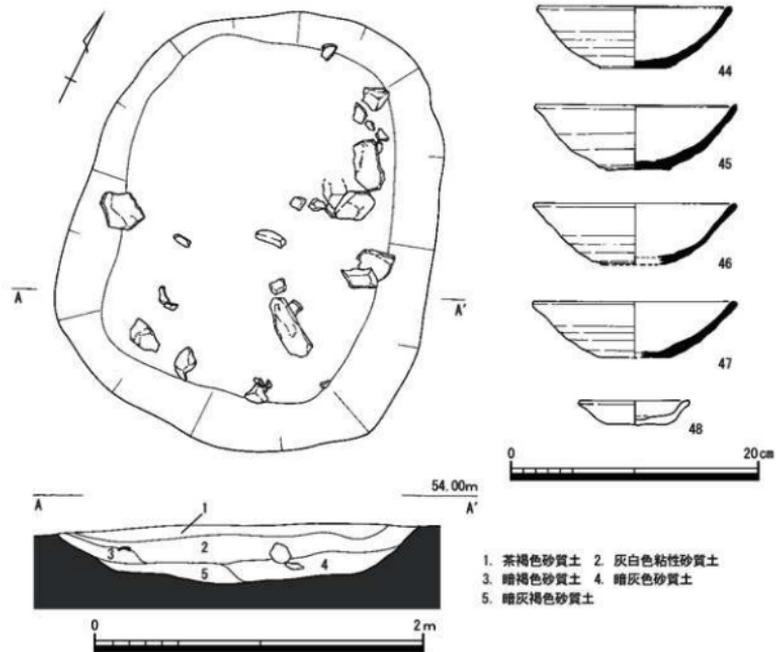
土坑SK103

SX102埋没後に掘られた土坑で、長径2.0m、短径1.0m、深さ0.2mである。埋土は灰色砂質土で、小片の須恵器、土師器が出土した。

土坑SK104

2区南半で検出した土坑である。平面隅丸長方形で東西約2.2m、南北約2.7m、深さ0.35mを測る。灰色系のやや粘性のある砂質土の埋土には人頭大から倍ほどのやや大振りの大きさの石が含まれる。

44～47は須恵器塊で口径16.5cm前後、器高5.0cmほどである。外側上方に直線的に伸びる体部で口縁端部を丸く収める。底部内面の凹みはほとんどなく、外面は糸切り未調整でわずかに段が残るものがある。48は径8.8cm、器高2.0cmの土師器小皿である。



第19図 SK104平・断面図 (Scale 1:30) 及び出土遺物 (Scale 1:4)

土坑SK105

2区南半で検出した土坑である。平面円形で径約1.0m、深さ約0.3mを測る。小片の須恵器、土師器が出土した。

落ち込みSX106

2区北端で検出した落ち込みである。今回の調査区内での検出長は約3.0mで、平面円形の大型の落ち込みと考えられるが、全体の規模、遺構の性格など不明である。検出した範囲での深さは約0.7mで灰色粘質土と砂層が互層堆積する。須恵器、土師器が出土したが小片で出土量も乏しい。中世の遺構と考えられるが詳細は不明である。

その他の遺構

1区の北半、SD102下層で拳大の石4～5石からなる集石を検出した。その後同様の遺構を東西で1基ずつ検出し、3基が東西に1.0m間隔で並ぶ状況になった。小片の須恵器を伴っており、柱の根石などを想定したが、今回の調査範囲で拡がる様子は確認できなかった。

このほか2区南東部でピットを10基ほど検出した。西側1区の南半ではピットなどの遺構は確認しておらず、地形的に低い西半では遺構の拡がりも確認していない。南東部のピットも今回の調査範囲内で明確に建物や柵列などには復元できなかった。既往調査の成果や地形などから判断すると、今回の調査地の東側に居住域が拡がるものと想定される。

第1遺構面について

第1遺構面での遺構の検出状況から、北東部の掘立柱建物SB101と南西側への落ち込みSX102、溝SD103・104はおおむね12世紀後半～13世紀初頭頃までの遺構と考えられる。SX102の下位で検出したSX104、SX105からやや古相の遺物が出土しており、段落ちの形成は11世紀後半頃からの可能性が考えられる。掘立柱建物SB101が建てられた12世紀代は居住域の一画であり、SD104は南西方向への下がり地形の変換点に位置し、建物が建てられた比較的平坦な面と都賀川に向かい緩やかに傾斜する地形を画する意図、機能があったと考えられる。

SB101の西側で検出した集石群SX101からはほとんど遺物が出土せず、構築時期、また遺構の性格についても現状では不明な点が多い。構築時期については、遺物包含層や上層の耕土層に伴う可能性を含め、建物や溝よりも新しい時期のものと捉えている。また石列SX103は集石遺構SX101と関連するものと考えているが、この石列もSD104が最終的に粗砂により埋没した後に据えられている。SX101の集石群、SX103の石列は建物が廃絶され、溝が埋没した後に築かれたもので、集石（石の集積）行為の継続を示しており、仮に墓などであった場合には居住域の縁辺部が新たに墓域などへ変化した可能性も想定される。図化し得ず、また産地は不詳であるが、SX101-09から出土した陶器片からは中世後半段階までは継続して集石遺構が構築されたと考えられる。SK101～103など石を伴う土坑も溝SD103・104、落ち込みSX102の埋没後に形成されたものであり、SX101と同様、周辺が耕地化されるまでの石の集積（石）の継続を示している。古代末から中世にかけて、宅地と居住域の縁辺部の機能を有する場所であったと考えられる。

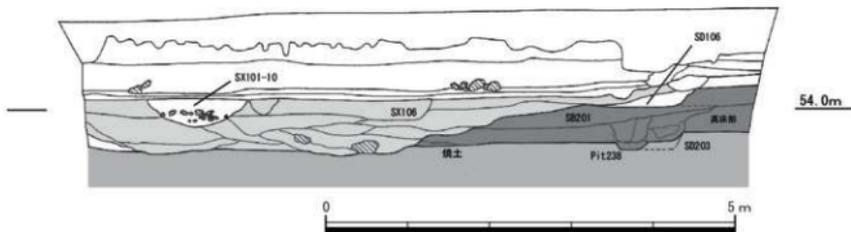
竪穴建物SB201

2区北東部で検出した竪穴建物で調査区の北側に続く。現状では推定径9.0mほどの平面円形を呈する建物と想定されるが、やや歪な箇所があり、石が集積される箇所などを建物隅とする多角形の可能性も考えられる。周囲には幅1.0～1.5mの高床部があり、その内側に方形の落ち込みがある。検出面から高床部までの深さは約0.1mである。南側の一部が途切れ、SX205とした長辺約2.0m、短辺約1.5mの平面長方形の土坑があり、この北側に人頭大の石を伴うSK208や径0.6～0.8m、深さ0.1～0.2mのSK206・207の土坑が並んでいる。建物入口や通路にあたるものと想定される。主柱穴は4本（SP201～204）でいずれも径約0.2m、深さ約0.3m、柱間隔はそれぞれ約3.0mを測る。SP201の底部では根石と考えられる石を検出した。遺構埋土は下層に暗灰褐色砂質土、上層に黒褐色粘質土が堆積し、埋土最上層では建物のほぼ中央部分から多量の礫と細片の土器がまとまって出土した。この部分は径約1.0mの円形の土坑状を呈し、深さ0.2m、埋土は黒色粘質土である。

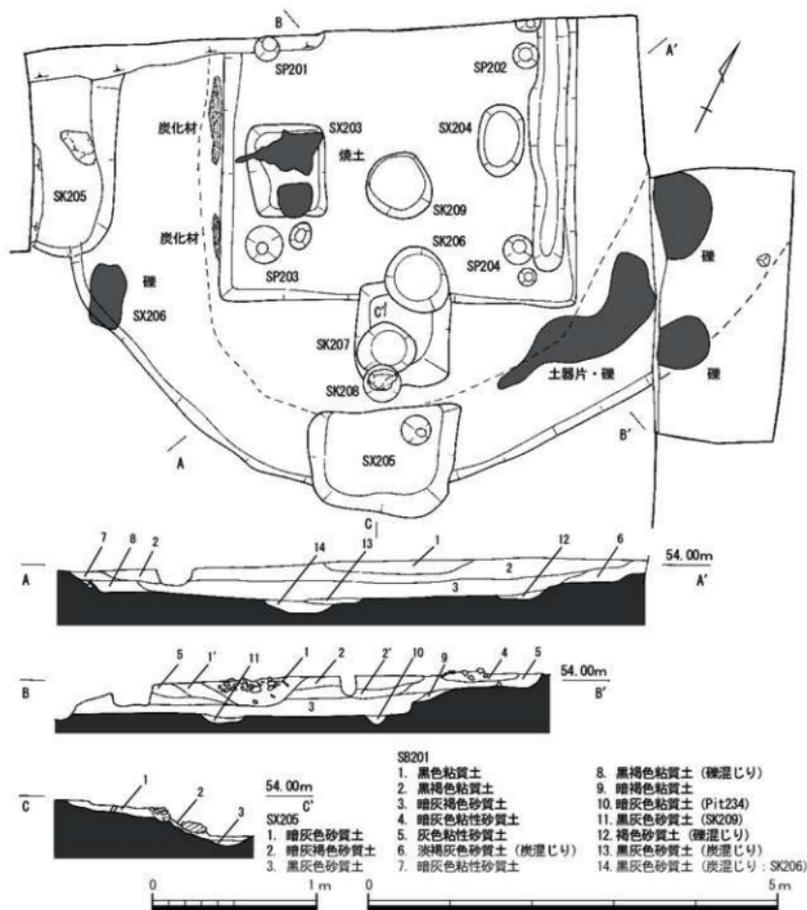
出土遺物は床面からはほとんど出土せず、埋土中や南東部の高床上から土器や礫がまとまって出土した。但し、破片のものが多く、また高床部出土の土器も堆積状況などから、地形的に高い建物の東側から流れ込んだ可能性が考えられ、建物廃絶後の投棄の状況を表すものと想定される。堯の底部の出土が目立ち、数量的に1棟の建物に属するものとは考えにくく、この点も廃棄された状況を示すものと思われる。

また西辺高床部、入口と考えられるSX205、南東高床部の3箇所から銅鏝が出土しており、特筆される。西辺高床部出土の銅鏝は周壁溝の可能性のある埋土中から出土しており、現位置を保つ状況と判断される。その他は埋土の掘削中や高床部での土器の検出中に出土しており、床面からやや浮いた状態での出土と考えられる。建物に伴うか、混入したかは明らかでない。

主柱穴を開く床面は一辺5.0mほどの方形の区画を形成し、高床部からの深さは0.3mほどである。建物の深さは検出面からこの落ち込みの床面まで最大0.5mを測る。調査時には平面円形の建物と切り合う方形の建物とも考えたが、堆積状況を観察する土層断面には明確な切り合い関係など認められなかった。落ち込み内では複数の土坑を検出した。いずれも深さ0.1mほどの浅いものである。西辺に沿って土坑SX203があり、被熱状況が顕著である。落ち込みの西側で炭化材が出土した。土坑内は炭や焼土が互層堆積しており、炉跡の可能性はある。建物から銅鏝が出土したことから焼土層など慎重に掘削を行ったが滓などは確認しておらず、铸造などに関連する遺物の出土もないことから関連性は乏しい。東辺で幅0.2m、深さ0.2mの溝SD203を検出したが全局はしない。出土銅鏝についてはP.32に記載する。



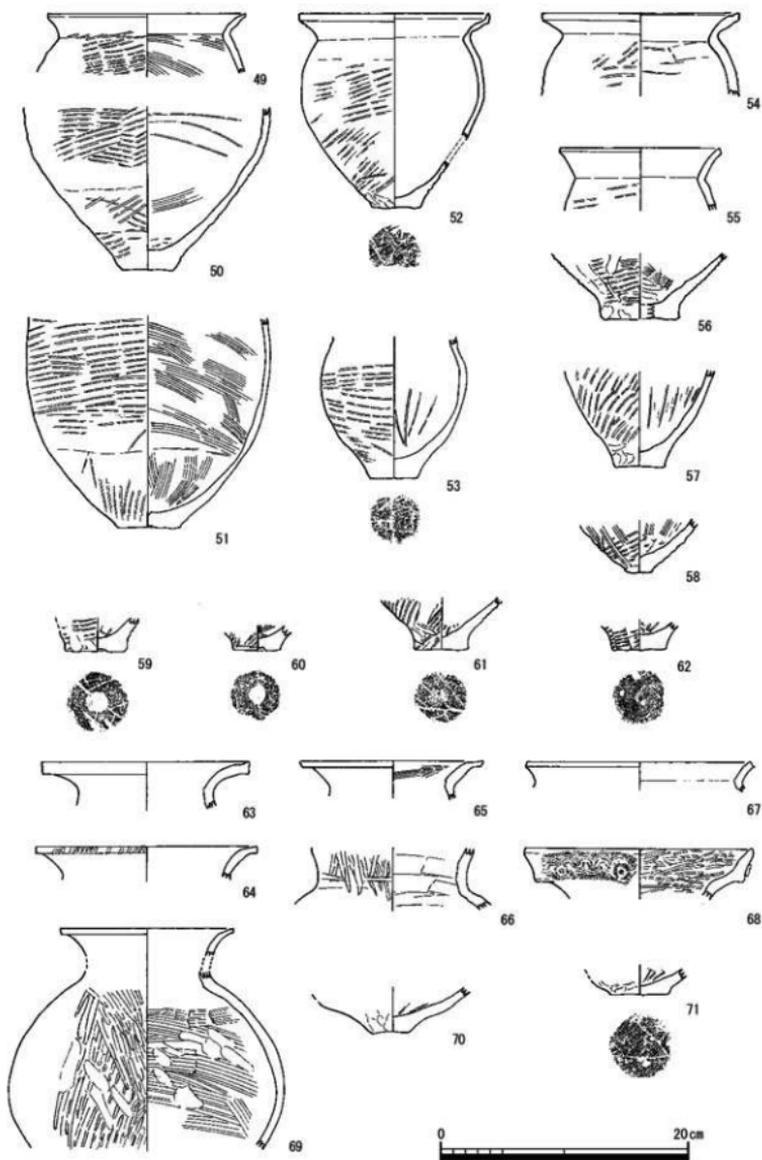
第21図 2区北壁土層図 (Scale 1:60)



第22図 SB201平・断面図 (Scale 1:60) 及び
SK205・SK208断面図 (Scale 1:30)

第23図 【写真】
SB201-SP201断ち割り根石検出状況 (南から)





第24図 S8201出土遺物(1) (Scale 1:4)

出土遺物

竪穴建物から出土した遺物は28リットル入りコンテナで3箱近くになるが、接合復元して全体の形状がわかる土器や、破片でも口径などの大きさや特徴が分かる土器は概して少なかった。高床部に土器片が集中する箇所があったが、床面からわずかに浮いた状態で出土しており、流れ込みの可能性を残している。高床部を含む建物床面から出土した土器は、南側の入口と考えられる落ち込みSX205の際から出土した鉢72と西側高床部から出土した高坏の脚84くらいで、床面検出の土坑は浅く遺物を含まない状態で、主柱穴からもほぼ遺物の出土はなかった。高床部上面、埋土中から出土した図化可能であった主な遺物について記す。

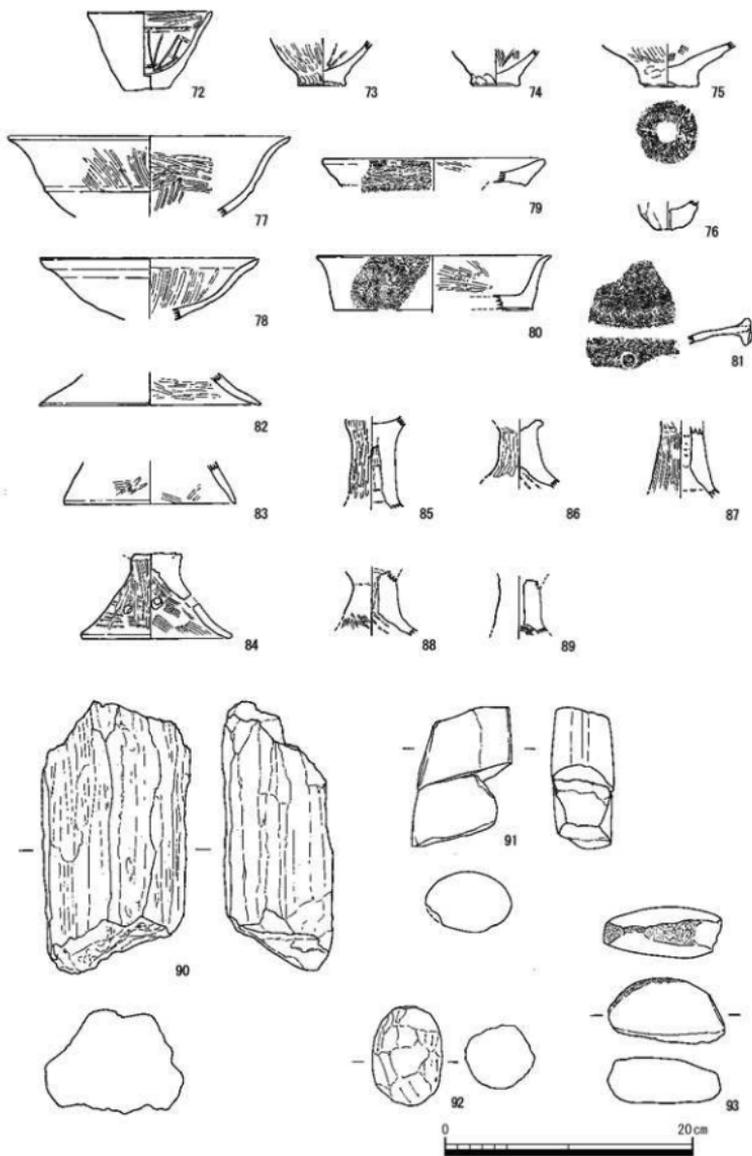
49～62は甕である。唯一全体の様子が分かる甕52は口径15.5cm、器高16.2cmで、大きさの判明する甕は同サイズのものが多いようである。これよりも大型の甕50・51などは胴部のみが出土し、口縁部は不明ながら、破片を含め量的には少ない印象を受けた。甕は外面、器壁の残りが悪く、タタキ成形の後ナデ調整が加わり、タタキの痕跡はあまり明瞭でない。胴部最大径より上方はほとんどが横位に近いタタキである。内面はハケ、あるいは板ナデ調整である。56～62は甕の胴部下半と底部である。外面は右上がりのタタキでナデ消しが認められる。58は底径の小さいものである。59～62には底面に葉脈の痕跡が残る。今回出土の多くの甕の底部に見られる。平底の土器にはもちろん明瞭に残るが、59・60の輪状高台の土器では内側底部にも痕跡が認められる。

63～71は壺である。63～66は広口壺口縁部及び頸部で、口縁部は外反しやや水平に伸び、端部に面を持つ。64の口縁部には刻目が施される。67は鉢の可能性がある。68は複合口縁壺で、復元径18.4cm、コンパス描きの波状文と円形浮文を貼り付ける。69は図上復元した。口径14.0cm、残存高30.0cmで球形に近い胴部である。口縁部は緩やかに外反する。体部外面はタテ方向の細かいヘラミガキとナデを施し、内面は細かいハケ調整を一部ナデ消す。70・71は壺の底部と考えられる破片で、70は底径が小さく、71は径5.0cmと大きい。71の底面に葉脈痕が明瞭に残る。

72は入口と考えるSX205北側の床面から出土した小型の鉢である。わずかに内湾して外方に伸びる体部で口縁部はやや外側に開く。体部外面はナデ、内面は板ナデ調整、口縁部の内側には横方向のハケ調整を施す。73・74は小型の台付き鉢の底部と考えられる。底部立ち上がりのユビオサエが明瞭である。75は器高の低いやや大型の鉢の可能性ある。底面に葉脈痕が明瞭に残る。外面は縦方向のミガキ、内面は板ナデ調整である。76は小型の鉢の底部穿孔と考えたものであるが、側面に面取りが見られた。蛸壺の一部の可能性も考えられる。

77～89は高坏あるいは器台と考えるものである。77・78は高坏の坏部で77は坏口縁部と体部境に段ができるもの、78は口縁端部が外反する。79・80は外面に稚拙な波状文を施したもので、80は体部がほぼ水平で口縁部が深く立ち上がるタイプと思われる。81は円形浮文と波状文で飾った小型の器台の口縁端部と考えられる。82～89は脚部で、84には穿孔が3箇所、外面はタタキ調整後、ミガキを施す。内面はハケ調整である。85・87には内面絞り痕がある。88・89は棒状工具で穿孔している。

90の大型の結晶片岩は粗製の石棒と考えられる。残存長22.5cm、幅11.5cm、厚さ8.5cmで断面の形状は台形で、端部は一部が抉られたままである。形状から縄文時代晩期のものと考えられる。建物埋土に流れ込んだとは考えにくく、石材として再利用が意図されたものと思われる。91は磨製石斧で残存長12.0cm、両端など欠損が多いが、丁寧に研磨されている。



第25図 S8201出土遺物(2) (Scale 1:4)

溝SD201

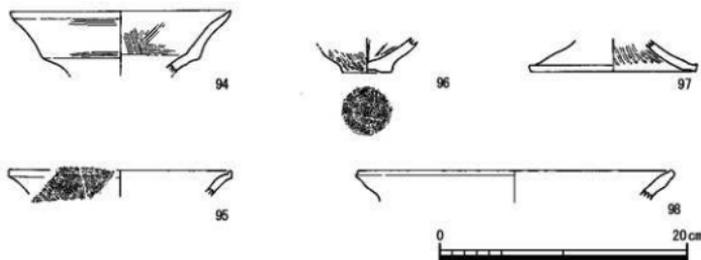
調査区の西半から1・2区の境で検出した溝である。調査区内では南東部をコーナーとする平面逆L字形の溝として検出した。西側と北側にさらに延びるものと判断される。検出長は東西(南辺)約4.5m、南北(東辺)約7.0mで、幅は1.0~1.4mである。深さはおおむね0.5mほどであるが、南辺の中央は土坑状となっており、この部分は検出面から約0.7mと最も深い。底から人頭大の石が1個出土した。反対に南東部は深さ0.1~0.2mと浅く、明確に溝として廻っていたのか判断しにくい状況である。溝の断面形状は基本的にU字状であるが、南辺の西端は平底の箱堀状となり、南東隅は浅い皿状を呈する。平面形状から方形周溝墓の可能性が考えられるが、供献土器と考えられる土器の出土はなく、明確な根拠に欠ける。遺物は小片で部位のわかるものが少なく、詳細は不明である。

土坑SX201

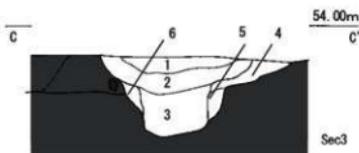
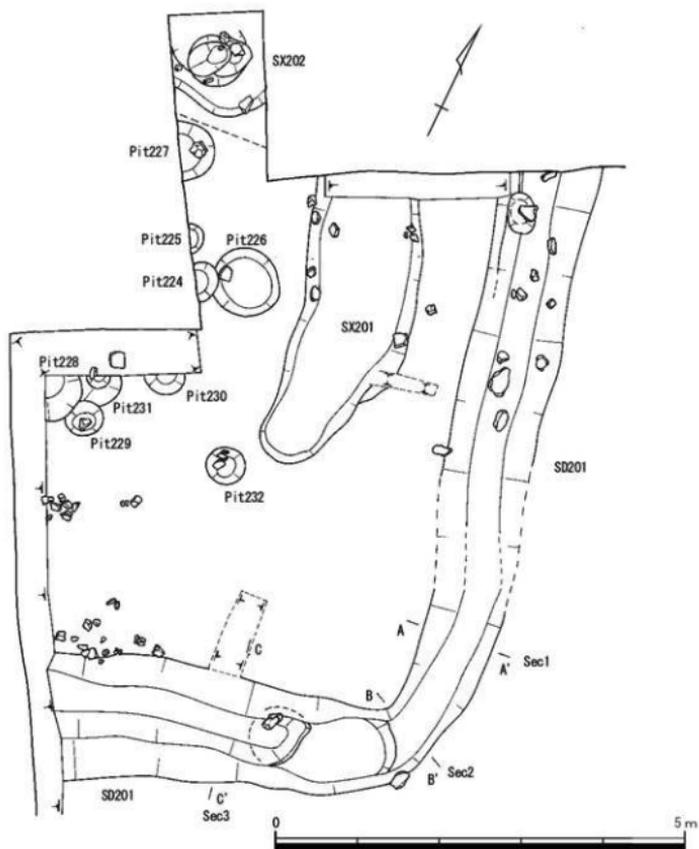
最大幅約1.5m、検出長約4.0mの落ち込みである。SD201に囲まれた内側に位置することから埋葬施設を想定したが、深さは0.1~0.3mで、底は平らな状況とはならなかった。平面形も当初は長方形のプランを呈するものと考えられたが、とくに南側については不明瞭となった。小片ながら弥生土器を主体として、縄文土器を含む比較的多くの土器片が出土したが、遺構に伴うものとは考えにくい。調査区北壁や西壁の土層観察では土坑状の落ち込みが重なる様子を確認したが、いずれも明確な遺構としては認識できなかった。周辺の南西側への下がり地形に堆積する褐色シルトの薄い堆積にも縄文土器片が多く含まれることから、SX201も西側への下がり地形の堆積層の一部であり、これを遺構として認識した可能性がある。

土坑SX202

1区北側への張り出し部で検出した。下部は土坑となったが、調査区壁面の土層観察から上部は溝状の落ち込みであった可能性がある。調査区外に拡がるため詳細は不明であるが、検出面から深さ0.4mの最深部は径0.6mほどの円形を呈する。弥生土器や縄文土器片が出土し、土坑状部分の中央で人頭大の石が出土した。石の出土状況はSD201南辺の中央部で溝の最深部から石が出土した状況と似る。今回の調査区内ではSD201の東辺の北側での折れが明瞭に検出できていないため、南北の溝間については不明であるが、石の検出状況から仮にSX202とした部分もSD201と同様、方形周溝墓を構成する溝であった場合には、溝中の土坑状の落ち込みと石は約8.0mを隔てて南北で対になっていた可能性が想定される。



第26図 SD201出土遺物 (Scale 1:4)



- | | |
|-------------|---------------|
| Sec1 | Sec3 |
| 1. 黑褐色砂質土 | 1. 暗灰色砂質土～極細砂 |
| 2. 淡灰黃色砂質土 | 2. 暗灰褐色砂質土 |
| 3. 灰褐色砂質土 | 3. 黑灰色粘性砂質土 |
| | 4. 暗褐色砂質土 |
| Sec2 | 5. 淡灰黃色砂質土 |
| 1. 灰褐色粘性砂質土 | 6. 暗褐色砂質土 |



第27圖 SD201平面圖 (Scale 1:60) 及び断面圖 (Scale 1:30)

溝や溝の内側で検出した落ち込みからの出土遺物で、図化できるものは限られた。

94は二重口縁壺の口縁部で復元口径18.0cm、外反する口縁部先端は細く仕上げる。内外面ともハケ調整で、外面はナデ調整が加えられる。95も壺の口縁でヘラ描きの鋸歯文がある。96は壺もしくは鉢の底部と考えられる。外面はタテ方向の細かいミガキ、内面はハケ調整である。97は高坏の脚部と考えられる。底径13.6cm、内面には細かいミガキ調整を施す。98は大型の鉢の口縁と考えられる破片である。復元口径26.0cm、肥厚化し、端部は外側に面を持つ。

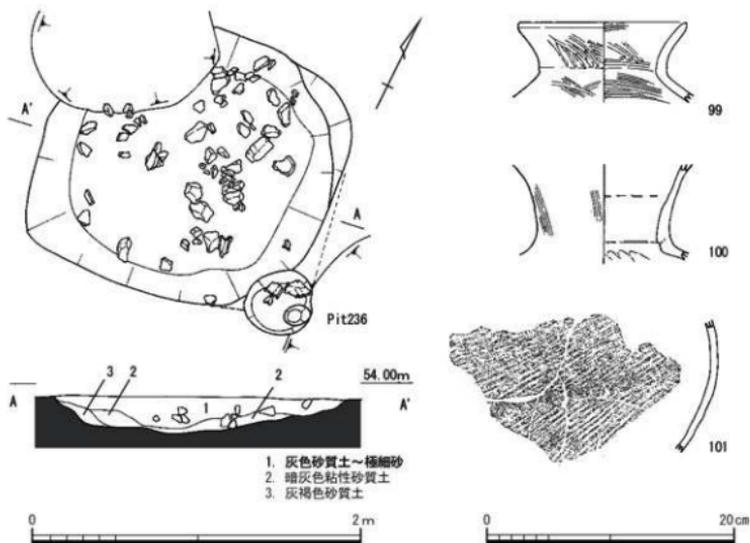
土坑SK201

2区南東部で検出した土坑で調査区東側に続くため全体の規模は不明である。検出状況からは径2.0mほどの平面円形の土坑と考えられる。弥生土器壺の頸部と考えられる破片が出土したが、このほかに部位の判明する土器の出土はなかった。

土坑SK202

2区南半で検出した平面方形の土坑で、一辺約1.5m、深さは約0.2mである。土坑の南東部で土坑を切る形でPit236を検出したが、同一遺構の可能性が高い。遺物は土坑上層とPitとした部分の上面からのみ出土した。下層から土器片の出土はほとんどなかったが、拳大ほどの石が多く出土した。

99は壺の口縁で復元口径13.6cmである。口縁端部を丸く収める。口縁部外面はミガキ、内面はハケ調整と一部ケズリが施される。体部上半は外面ミガキ、内面はハケ調整である。100は壺の頸部で外面ハケ調整、内面はナデで体部との境に指押さえの痕跡が残る。101は壺の胴部で外面は右上がりのタタキ、内面は板ナデとハケによる調整である。

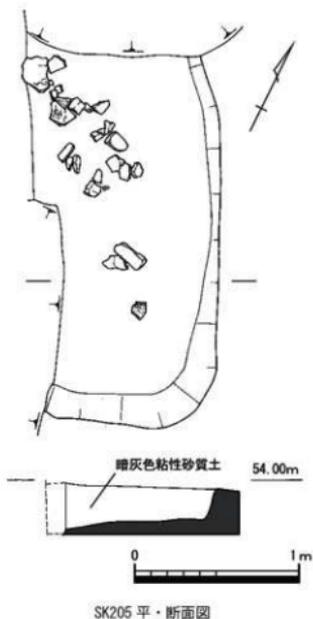


第28図 SK202平・断面図 (Scale 1:30) 及び出土遺物 (Scale 1:4)

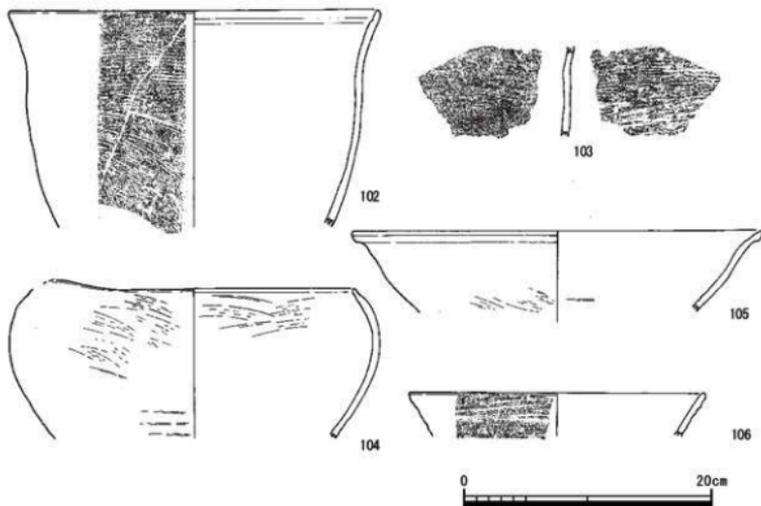
土坑 SK205

2区北西隅で検出した土坑で、堅穴建物SB201の高床部と重複するが、削り残されたと考えられる。調査区内で東西約1.0m、南北約2.5mを検出し、北側は中世の落ち込みSX106に切られるが、今回の調査範囲外に続くものと考えられる。規模や平面形は不明である。埋土は暗灰色粘性砂質土の単一埋土で、遺物は上層の検出面付近からのみ出土し、埋土下層からの出土はなかった。検出面から約0.3m下が地山面で、この面で人頭大から60cm大の比較的大きな石を3石検出した。周囲に土石流の痕跡などはないが、地山面あるいは遺構に伴うものか明らかでない。

102は復元口径32cmの深鉢である。口縁から体部上半に二枚貝によるケズリの条痕が残る。103は同一個体で口縁部から胴部への緩い屈曲部に径7mmの穿孔がある。104は山形口縁の深鉢で口縁部から内湾する胴部上半は丁寧なミガキ調整である。105・106は浅鉢でいずれも口縁端部は肥厚し、やや外反する。内面はミガキ、外面下半は粗いケズリ成形である。いずれも縄文時代晩期の土器である。



SK205 平・断面図



第29図 SK205平・断面図 (Scale 1:30) 及び出土遺物 (Scale 1:4)

第2遺構面について

第2遺構面では弥生時代と縄文時代の遺構を検出した。堅穴建物からの出土遺物は弥生時代後期後半～終末期に属するものである。高床部土器集中部、遺構埋土、最終埋土上層、中央で検出した礫と土器片の集積部分出土の土器を含め、終末期までの時期幅が想定される。

溝SD201からの出土遺物は小片かつ少量であった。溝の平面形状から方形周溝墓の可能性を想定しているが、供献土器と考えられる土器は出土しておらず明確な根拠に欠ける。堅穴建物と同一面で検出したことにより、墓とした場合には構築の前後関係など、周辺が居住域あるいは墓域といった土地利用の変遷などについては検討が必要になるだろう。

さらに同一面で縄文時代晩期の遺構を検出した。明確な遺構は土坑SK205のみであったが、西側、SD201に囲まれた内側の堆積層に縄文時代晩期の土器片の混入が認められた。調査区西側への下がり地形に堆積する土層で、一部はSX201となったが、調査区土層断面には土坑状の落ち込み形状が見られることから、付近に同時期の遺構・遺物が広がる可能性が考えられる。第1遺構面でも西側へは下がり地形を形成しており、調査地周辺は傾斜地への変換点の様相が長い間継続していたと考えられる。

(3) 第3遺構面

黄灰色砂質土の地山面で径0.2～0.4mのピットを20基ほど検出した。いずれも深さ0.2mほどである。出土遺物に乏しく、弥生土器や縄文土器と考えられる土器片が出土したピットがあるが、詳細な時期は不明である。

調査区の土層断面を観察すると、第2遺構面のベース層である灰褐色砂質土から掘り込まれたと見えるピットも多い。遺構埋土が遺構面を形成する土壌とほとんど変わらないために検出が困難であった。一部のピットには焼土や炭の粒子の混入も認められたが遺物もほとんど出土せず、また建物などを構成するものにはならなかった。

(4) その他の出土遺物

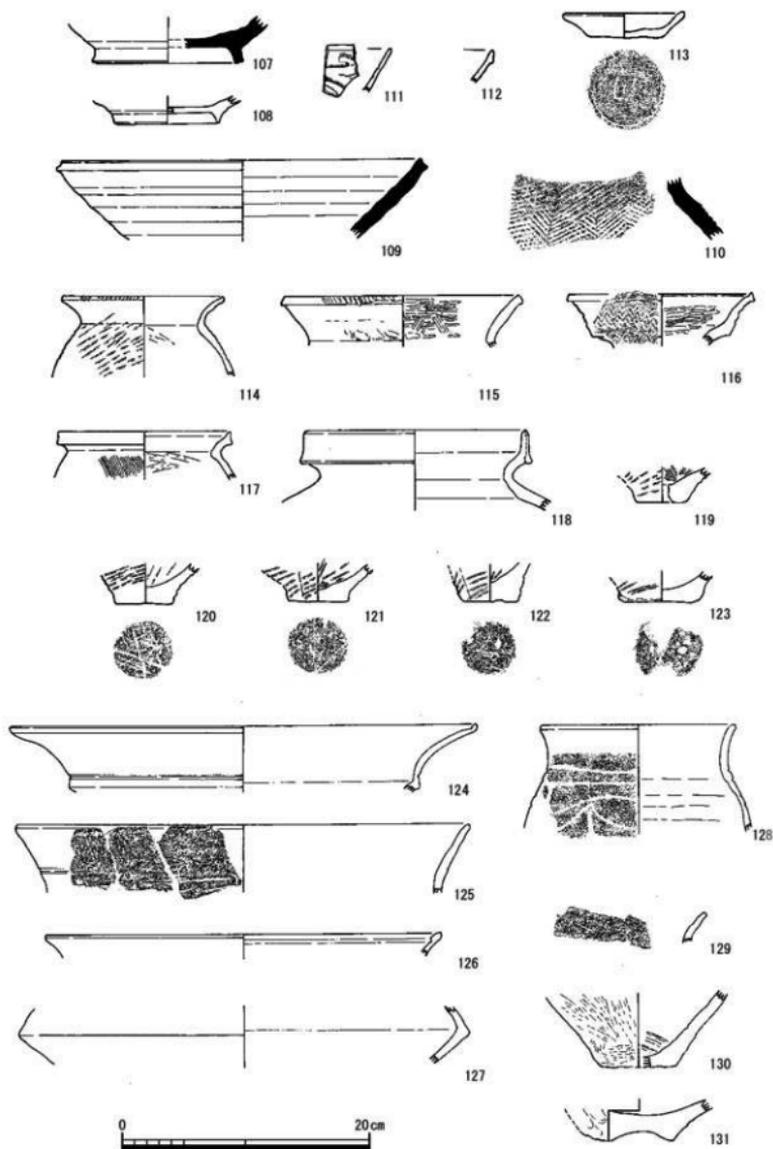
①遺物包含層及び盛土層出土土器類

2区の北半を中心に近世以降の耕作地造成に伴う盛土層が堆積し、この層や旧耕土層から縄文時代～中世の土器が多く出土した。周辺に同時期の遺構・遺物の拡がりが見られる。

107～113は古代から中世に属するもので、107は平安時代の須恵器鉢の底部で内面に墨痕がある。ほかに109・110の中世の須恵器鉢や甕、灰釉陶器の境底部108、青磁碗の破片111・白磁碗口縁部片112、底部糸切りの土器器小皿113などが出土している。

114～123は弥生時代後期後半に属するもので、114・115は口縁端部にタタキ痕のある淡路型とされる甕である。116は稚拙な波状文が施された二重口縁壺、117・118は吉備地方など瀬戸内系の搬入土器と考えられる。119～123は底部片で、いずれも外面は右上がりのタタキ成形である。119は底部穿孔土器である。120～123の底面には明瞭に葉脈の痕跡が残る。土器成形時の木葉の使用を示し、今回の調査で出土した甕形土器の底に多くみられた。

124～131は縄文土器でいずれも晩期中葉に属するものと考えられる。124・125は復元口径40cmほどの深鉢の口縁である。外面はケズリ、内面はミガキ、ナデ調整である。126は復元口径32cmの浅鉢口縁、127は胴部最大径36cmの浅鉢屈曲部の破片である。128は亀ヶ岡式土器で北陸系の搬入土器かと推測される。129は浅鉢口縁で山形に三角突起が組み合わさる。130・131は深鉢の底部で外面ケズリ成形である。

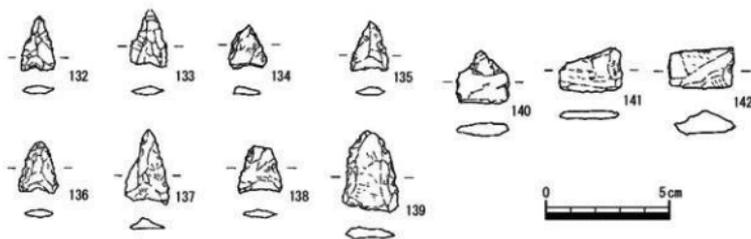


第30図 旧耕土層・遺物包含層・盛土層出土遺物 (Scale 1:4)

②石器

SB201から石棒90、石斧91、磨石92・93が出土したほか、石鏃(132～139)、楔形石器(140～142)が出土した。計測値を第2表に示す。

石鏃はいずれも無茎鏃で基部は139が平基式、その他は凹基式である。石鏃137～139と楔形石器140～142は弥生時代の遺構、あるいは縄文～弥生時代の堆積層からの出土である。そのほか中世以降の遺構、堆積層への混入である。



第31図 出土石器 (Scale 1:2)

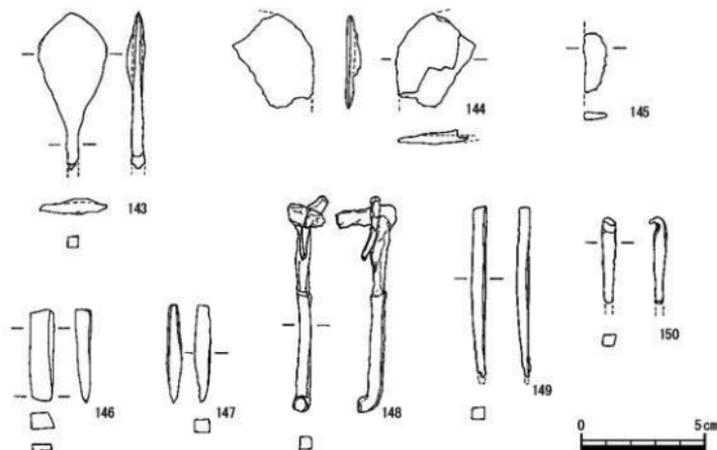
遺物番号	遺物名	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	空中重量 (g)	体積 (cm ³)	見かけの比重
132	石鏃	2区 灰色砂質土 (中世旧土層)	20.59	13.94	3.88	0.99	0.41	2.41
133	石鏃	1区 暗灰色砂質土 (古代包含層)	(20.10)	15.25	3.50	0.94	0.38	2.47
134	石鏃	1区 SD103	16.61	15.39	2.49	0.63	0.25	2.52
135	石鏃	1区 SD104	19.65	14.78	3.43	0.81	0.32	2.53
136	石鏃	1区 SD104	20.28	15.88	3.39	0.99	0.39	2.54
137	石鏃	1区 SX201	29.67	17.41	3.84	1.37	0.53	2.58
138	石鏃	1区北 褐色砂質シルト (縄文?堆積層)	(18.56)	18.15	3.07	1.03	0.40	2.58
139	石鏃	1区 黒褐色粘質土 (弥生包含層)	33.24	22.61	4.95	4.37	1.59	2.75
140	楔形石器	1区 SX201	(15.54)	25.74	9.34	4.83	1.84	2.54
141	楔形石器	1区 SX201	(17.64)	25.56	3.92	2.13	0.84	2.54
142	楔形石器	2区 SB201	(20.55)	21.78	5.77	3.07	1.18	2.60

第2表 出土石器一覧 (長さのカッコ付き数字は残存長、幅・厚さは最大値)

③金属製品

鉄製品

143は有茎柳葉式の鉄鏃と考えられる。残存長6.33cm、鏃身部最大幅2.75cm、厚さ0.6cm、茎は断面0.45×0.46cmの方形である。144・145も鏃の可能性のある破片である。145は板を折り曲げた状態で中は空洞となっており、現状、詳細は不明である。146・147は先端を薄く仕上げた棒状の製品でノミや鑿の可能性が有る。148は残存長3.95cm、2個の製品が錆で固着している。本来の形状、用途など不明である。鏃と考えるものはいずれも12世紀の遺構SD104からの出土であるが、形状から弥生時代の遺物と判断される。147は中世の遺構SX106への混入である。これらは堅穴建物SB201と近接する上層遺構へ混入したもので、弥生時代の遺物の可能性が高いと判断している。146・148は弥生時代の遺物包含層や遺構面上からの出土である。149・150は鉄釘で中世のものとして判断される。



第32図 出土鉄製品 (Scale 1:2)

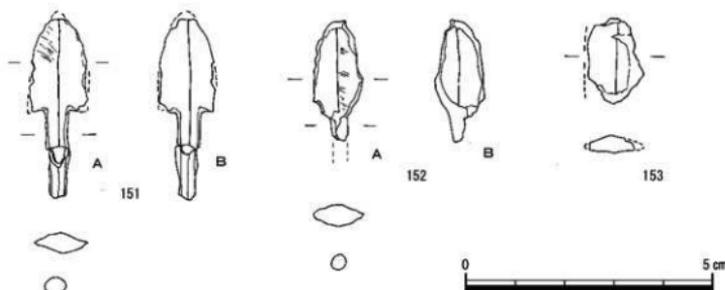
遺物番号	遺物名	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
143	鉄鏃	1区 SD104	(6.33)	2.75	0.67	12.74	基部 幅0.45 厚0.46 (cm)
144	鉄鏃?		(3.8)	(3.3)	(0.6)	7.78	
145	板状製品		(1.49)	(1.38)	0.27	1.19	
146	棒状製品	1区 黒褐色粘質土	(3.95)	(5.85)	0.66	8.10	幅・厚は図化部分
147	棒状製品	2区 SX106	3.95	0.61	0.53	2.50	幅・厚は図化部分
148	棒状製品	1区 SD201 北壁脚部	3.78	0.92	0.63	4.31	幅・厚は図化部分 下部先端厚0.23 (cm)
149	釘	2区 櫻灰色砂質土 (中微細礫土)	(3.48)	0.52	0.46	1.92	
150	釘		(6.95)	0.54	0.49	3.09	
151	銅鏃	2区 SB301	(3.61)	1.19	0.76	1.61	基部 径0.37 (cm)
152	銅鏃		(2.64)	(1.02)	0.31	2.06	基部 径0.31 (cm)
153	銅鏃		(1.75)	(1.12)	(0.37)	1.32	残存部

第3表 出土鉄製品一覧 (カッコは残存長。鏃は残存部の全長・幅は鏃身部の数値。備考に茎の数値を補記。)

銅製品-出土銅鏃について-

今回の調査ではSB201から銅鏃が出土した。鏃と判断できるもの3点、破片2点、その他、銅塊1点である。銅鏃2点151・152は有茎鏃と判断できる。

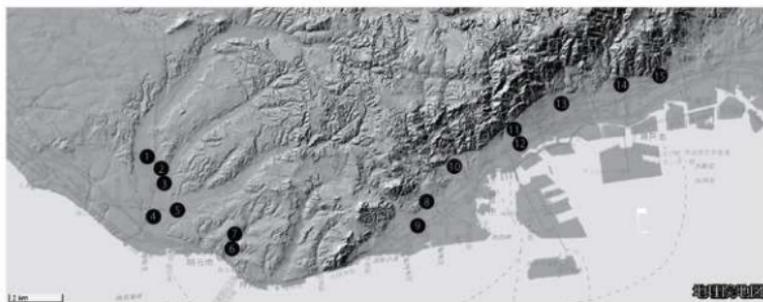
151は建物西側の高床部、周壁溝の可能性のある埋土中から出土し、唯一、出土状況が把握できた。残存長3.61cm、鏃身部幅1.19cm、厚さ0.76cm、基部は径0.37cmである。A面に擦痕が認められる。平基式で铸上り、遺存状態ともに良好である。152は南東部の高床部で出土した。土器群に含まれるか、高床面からの出土が判然としない。残存長2.64cm、幅1.02cm、茎がわずかに残る。茎径0.31cmである。鏃身部は両面とも鑄が明瞭でA面に擦痕が残る。153は鏃身部の破片と考えられる。残存長1.75cm、鑄が確認できる。他2点の破片にも鑄と思われる稜が認められる。他に銅塊が出土したが、何らかの製品の一部、あるいは铸造工程で生じたものかは明らかでない。



第33図 出土銅鏡 (Scale 1 : 1)

地区番号	遺跡名	調査回数	出土遺物・層位	出土遺物・層位	時期	所在地	備考	文献
1	玉津田中遺跡	第4次調査	1点	SD309 SD603	後期	西区平野町中津		『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』 1993神戸市教育委員会
		第6次調査	1点	SD70 第12トレンチ	生内期?	西区平野町中津		『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』 1995神戸市教育委員会
		第15次調査	4点	SB802	後期後半～生内期	西区平野町大野	整穴建物内一括出土。 厚板銅鏡3点 帯状銅製品1点併存	『玉津田中遺跡発掘調査報告書第8号-10-12-15次調査』 2000神戸市教育委員会
2	小山遺跡	第2次調査	1点	SD901 第15トレンチ	後期	西区小山3丁目		『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』 1997神戸市教育委員会
3	日輪寺遺跡	第14次調査	2点	SB91	後期後半～生内期?	西区玉津町小山	整穴建物内一括出土。	『平成22年度神戸市埋蔵文化財年報』 2013神戸市教育委員会
4	吉田南遺跡	第11次調査	1点	SB94	後期	西区森友3丁目	古墳時代整穴建物出土	『吉田南遺跡発掘調査報告書』 1980神戸市教育委員会、吉田山遺跡調査団
5	新方遺跡	—	1点	SB94 整穴建物内1点	中期	西区玉津町高津橋丁ノ坪	円柱式	『新方遺跡発掘調査報告書』 1984神戸市教育委員会
6	大成遺跡	—	1点	表保	後期?	垂水区舞子坂4丁目	基部が棒状銅製品併存	『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』 1997神戸市教育委員会
7	東谷遺跡	—	1点	表保	後期	垂水区南多聞台4丁目		『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』 1997神戸市教育委員会
8	長田神社境内遺跡	第1次調査	1点	SD92	生内期	長田区長田町2丁目		『平成25年度神戸市埋蔵文化財年報』 2013神戸市教育委員会
9	松野遺跡	第7次調査	1点	SE203	後期	長田区日吉町2丁目	古墳時代SC、舟形出土	『松野遺跡発掘調査報告書第3-7次調査』 2001神戸市教育委員会
10	青洲町遺跡	第4次調査	1点	SB93	後期	兵庫区青洲町	鏡×17枚併	『平成25年度神戸市埋蔵文化財年報』 2016神戸市教育委員会
11	熊内遺跡	第2次調査	1点	SA01	後期	中央区熊内通6丁目	鏡型式不明	『神戸市中央区熊内遺跡 第2次調査』 1996六甲山遺跡調査委員会
12	日暮遺跡	第1次調査	1点	重頼新田中	古墳時代前期?	中央区日暮通1丁目	古墳時代遺物包含層中	『日暮遺跡発掘調査報告書』 1989神戸市教育委員会
13	篠原遺跡	第40次調査	3点	SB301	後期後半～生内期?	灘区篠原南町3丁目	整穴建物内一括出土 銅管文点併存	『平成29年度神戸市埋蔵文化財年報』 2020神戸市教育委員会
14	西岡本遺跡	第12次調査	1点	包含層	包含層	灘区岡本4丁目	基部のみ	『平成29年度神戸市埋蔵文化財年報』 2020神戸市教育委員会
15	森北町遺跡	第7次調査	1点	埋瓦	後期	灘区森北町4丁目		『平成26年度神戸市埋蔵文化財年報』 1992神戸市教育委員会
		第8次調査	1点	SB94	後期	灘区森北町1丁目		『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』 1993神戸市教育委員会
16	宅原遺跡	第12次調査	1点	SD92	後期	北区長尾町宅原	整穴外周部	『平成61年度神戸市埋蔵文化財年報』 1989神戸市教育委員会

第4表 神戸市内銅鏡出土遺跡一覧



第34図 市内銅鏡出土遺跡位置図 (明石川流域及び六甲山南麓の遺跡を掲載。16. 北区宅原遺跡を除く)

第3章 まとめ

第1節 今回の調査成果について

今回の調査では3面の遺構面を確認し、縄文時代晩期、弥生時代後期～終末期（庄内式並行期）、平安時代末～鎌倉時代の3時期の遺構・遺物を検出した。今回の調査の成果と関連する内容について記しておきたい。

縄文時代晩期、また中期～後期の遺構・遺物はこれまでは調査地の北側、阪急電鉄神戸線の線路以北で確認されていた。線路以南での遺構の検出は初めてであり、分布域がさらに南側に広がる事が判明した。検出遺構は土坑1基のみであったが、調査区東半で確認した現耕土層下の盛土層からは破片ながら多くの土器が出土している。他地域からの搬入土器と考えられる亀ヶ岡系土器が含まれていた。線路の北側に位置する同一地点の第2・6・30次調査地とその東の第5・9・17・37次調査地が位置する標高55～60m付近では縄文時代後期～晩期の遺構・遺物が多数検出されており、居住域であったと想定される。阪急電鉄神戸線の敷設前に付近を削平して耕作地が造成された可能性が考えられる。

過去39次に及ぶ調査での検出遺構・出土遺物の中心は弥生時代後期に属するもので、第12次調査では同時期の多量の土器が投棄された大溝の埋土上面から小型仿製鏡が出土した。篠原遺跡の盛行期を示す特筆される遺物であり、拠点集落と位置付けられる根拠の一つである。

今回の調査では後期後半～終末期の堅穴建物SB201や周溝墓と考えられる溝などを検出した。SB201は推定径約9.0mを測る大型の堅穴建物で、ここから少なくとも銅鏡3点が出土した。銅鏡の出土は今回を含めると神戸市内で16遺跡26点となる（第4表）。日暮遺跡出土の銅鏡が古墳時代前期、新方遺跡出土の銅鏡が中期のものである。それ以外は後世の遺構などから出土したものを含むが後期のものと考えられる。同一の堅穴建物からの複数個出土は玉津田中遺跡第15次調査SB02、日輪寺遺跡第14次調査SB01に次いで3例目である。玉津田中遺跡SB02は最大幅（径）7.8m、平面五角形の大型の建物である。日輪寺遺跡SB01は長辺16.15m、短辺4.7mの平面隅丸長方形の建物で多量の土器の投棄が認められる。

弥生時代の銅鏡については、これまで形態分類を中心に分布や地域色などが論じられてきたが、形態が多岐に渡ることから、近年は鋳型や連鑄式未製品を例に製作技術の面からの分類も試みられている。小型で斉一性の高い量産タイプ（1類）と比較的大型で個々に製作される精緻な形状のもの（2類）の2種に分類され、2類に地域色が表れ、また儀器的な要素も加味されると考えられている。市内出土の銅鏡はいずれも有茎鏡で小型の部類、いわゆる1類に属するものである。儀器的要素があるものは未確認で、今のところ地域色のようなものは認められない。鏡身幅や逆刺の形状など様々であるが、今回出土した銅鏡151は鋳上りが良く、ほか2点は遺存状態が良好ではないものの形態や大きさは近似し、この傾向は同一建物から複数個の銅鏡が出土した玉津田中遺跡、日輪寺遺跡に共通しており、興味深い。その他の出土銅鏡で特徴的なものを挙げると、玉津田中遺跡第15次調査SB02出土銅鏡のうち2点は東海地方に類例の多い穿孔鏡である。2点出土しており、多孔、単孔1点ずつある。熊内遺跡出土の銅鏡は形状的には五角鏡のようになるが、鋳型のズレにより二度の流し込みにより生じた形状と説明されている。連鑄式による製品の可能性も考えられようか。雪御所遺跡の銅鏡は鋳バリが残り、付近で製作されたものでなければ流通形態を考える上で興味深い資料といえる。

出土遺跡の分布をみると、市内西半、明石川流域や山田川流域では拠点集落と近接する遺跡から出土している。六甲山南麓では等間隔に保有遺跡が分布、逆に銅鏡を保有する拠点的な集

落が一定間隔で立地している様子が窺える。連鑄式の鑄型で量産された小型の製品は実用的で比較的複雑な製品が多いようだが、市内の遺跡から出土した銅鍍は小型ながら形態の整った製品が多い。出土数からすると当地域では威信具としての要素が大きいとも考えられる。いずれにせよ新たな資料が追加された意義は大きい。

また調査区西半で検出したSD201は形状から方形周溝墓の可能性が考えられる。供献土器の出土はなく、明確ではないが、建物と近接して検出したことから、周溝墓であれば居住域、墓域という周辺の土地利用を考えるに際して重要な要素になる可能性がある。篠原遺跡の南に位置する都賀遺跡ではこれまでに弥生時代中期の方形周溝墓が12基確認されている。Ⅲ期の構築とされるものがあるが、ほぼⅣ期のもの、中期後半に構築された墓域と考えられる。造営集団の居住域は今のところ都賀遺跡では検出されていない。篠原遺跡も有力な候補地とされるが、Ⅳ期の土器の出土、堅穴建物の検出などはあるものの、その量は総じて少ない状況である。

弥生時代中期には六甲山系南麓の丘陵上に多くの高地性集落の形成が始まる。篠原遺跡、都賀遺跡の裏山、標高150～180mの範囲には伯母野山遺跡が立地する。集落形成はⅣ期と捉えられ、Ⅴ期初頭まで継続する。伯母野山遺跡では堅穴建物の検出や多くの出土土器とともに板状鉄斧、石杵など特異な遺物の出土が知られる。伯母野山遺跡の様相は篠原遺跡、さらに都賀遺跡との関係において重要なものである。都賀川流域の遺跡については後述する。

次に古代末から中世にかけての遺構・遺物を多数検出した。掘立柱建物や土坑、地形に沿った、屋敷地を区画する溝、やや時期は下がるものと思われるが、集石群といった遺構である。付近は平安時代末～鎌倉時代初頭にかけて、平家一門や摂関家ゆかりの地として文献史料にも記述が現れる。検出遺構は古代末から中世、また近世の文字に記された内容をイメージさせ、都賀庄（篠原村）の景観を復元する上で重要な成果と考えられる。

今回の調査での検出遺構・遺物により、篠原遺跡についてはもちろん、近接する周辺遺跡との関係、集落域・墓域など土地利用の推移を考える上で重要なデータが得られた。発掘調査の進展によるデータの蓄積により、都賀川流域の縄文時代・弥生時代の様相をはじめとして六甲山南麓の状況にまで言及できる可能性がある。また古代～近世の荘園・農村集落の様相が明らかになることも期待されよう。

第2節 篠原遺跡での既往調査の成果

(1) 篠原遺跡の時代別検出遺構・遺物の分布状況

第1章第2節で篠原遺跡の既往調査を一覧化した。40回目の調査となる今回の調査を含め、現状で考えられる遺跡の様子について記す。これまでに十分な整理作業が行われていない調査が多く、時代・時期など調査時の所見を前提としており、多分に推測を含むものである。

第3図により遺跡範囲に比して発掘調査に至った件数が少ないことを記した。遺跡の中央東寄りの範囲に空白部分があるが、開発に伴う事前の確認調査の様子などから旧の六甲川の流れや宅地造成などによる地形改変の影響を早くから受けた箇所が多い状況も窺える。

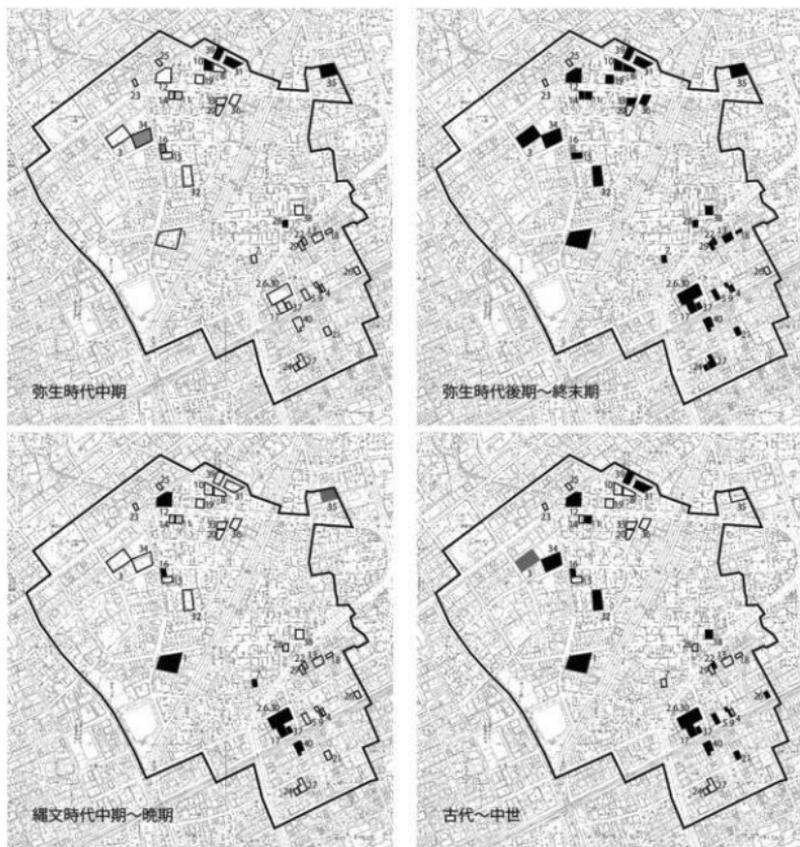
縄文時代・弥生時代・古代～中世の各時代の検出遺構・遺物が確認された調査地を第35図に示した。各時代の分布傾向について概観したい。

縄文時代については今回の調査地の北側、先述した第2・6・30次調査地とその南側の調査地にまとまりがある。加えて遺跡の北西部の第12次調査地から第3次調査地にかけて帯状に広がる可能性が窺える。地形的に河川の影響を受けつつも高まり地形を残す範囲があるもの

と予測される。

弥生時代については後期後半の遺構・遺物がほぼ全域において検出されている。遺跡の中心となる時期のもので、遺跡範囲を策定する際の根拠である。検出のなかった調査地では後世の削平の影響も考えられ、また弥生時代中期・後期と考えられる土石流の堆積のみが検出される調査地もあり、本来は遺構の形成があった可能性もある。中期の遺構・遺物が検出される調査地は遺跡の北半、比較的高位に位置しており、南半での遺構・遺物の出土は明確でない。

古代～中世についてもほぼ全域で遺物は出土するが、掘立柱建物などまとまった遺構の検出は今回の調査地と南東の第21次調査地など遺跡の南半において現状では検出例が多い。北半の調査地でも遺構は検出されるが、柱列や土坑がほとんどである。柱列などは調査範囲の制約があるため不明であるが、小規模な遺構の検出に留まる状況である。

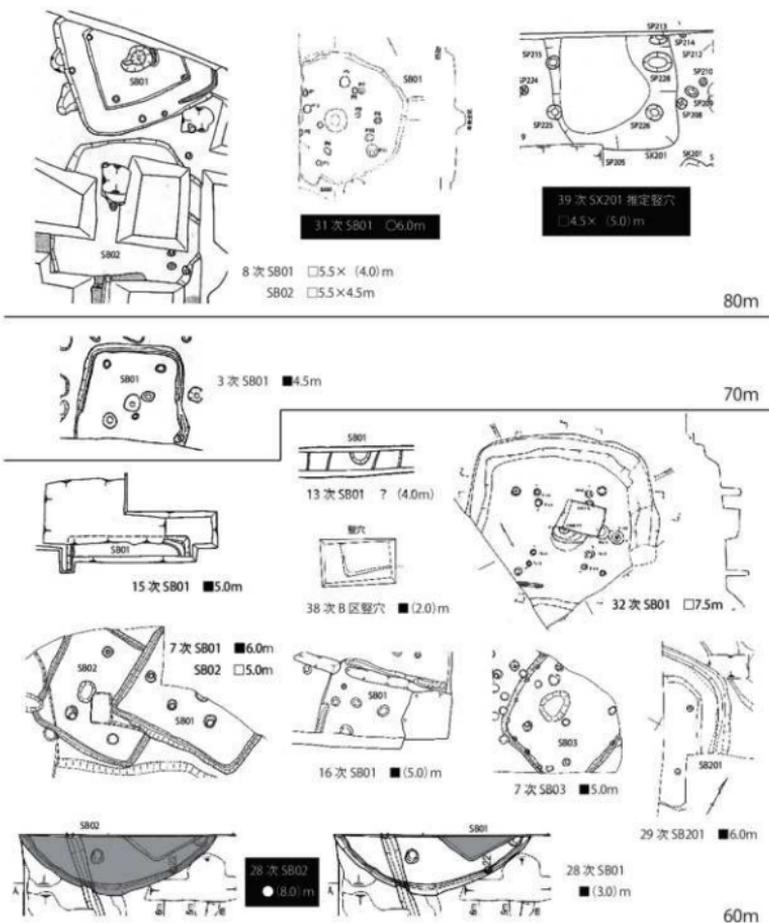


第35図 時代別遺構・遺物検出調査地分布図 (Scale 1:10,000) *黒塗りが該当する調査地

(2) 篠原遺跡における竪穴建物の検出について

篠原遺跡でこれまでに検出された弥生時代に属する竪穴建物の平面図を集成し覚えとしておきたい。発掘調査件数、調査面積からすると竪穴建物が発出される割合は比較的高いものと思われる。詳細な時期が不明なもの、一部のみを確認したもの、住居址状と表現されるものを含むが、弥生時代中期と後期～終末期にかけての竪穴建物25棟が確認されている。標高10mビッチで分布域を示し、時期・平面形・規模(いずれも推定含む)を付した。

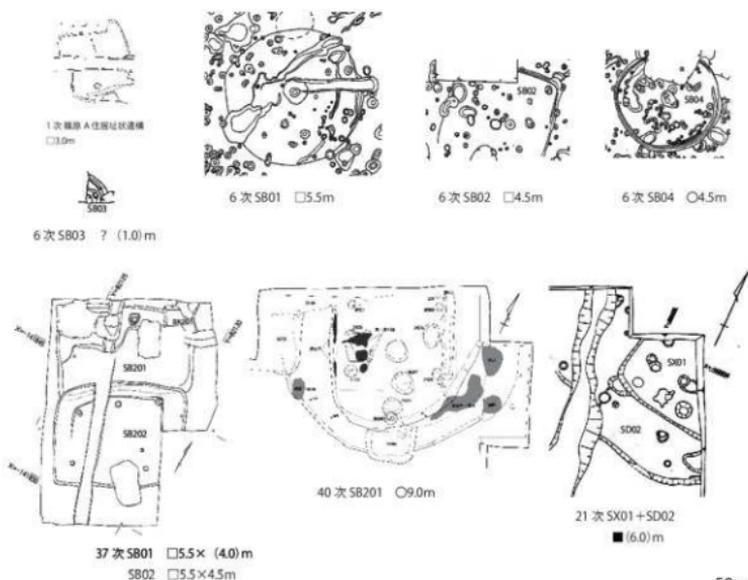
数的には後期(後半)～終末期にかかるものが多く、中期の建物はわずかである。規模は



第36図 篠原遺跡検出(弥生時代)竪穴建物(1)(Scale 1:200)

5.0m前後のものが多い。第32次調査SB01からは28リットル入りコンテナ7箱分の土器が出土、第29次調査SB201は直近から鉄鍬が出土、第27次調査SB01からは朱の付着した土器が出土、今回の第40次調査SB201からは銅鍬、直近から鉄製品が出土するなど、分布域に関わらず規模のやや大きい建物に優位性は認められる。中期の建物は比較的高位の調査地で検出され、同時期の土器の出土も現状では高位の調査地に限られる傾向が窺える。

60m



50m

第37図 篠原遺跡検出(弥生時代) 竪穴建物(2) (Scale 1:200)

(3) 都賀川流域の遺跡（篠原遺跡と都賀遺跡・伯母野山遺跡）

篠原遺跡での時代別の遺構・遺物の検出状況、堅穴建物の検出状況を図示、合わせて都賀遺跡での堅穴建物、周溝墓の検出状況を下図に示す（第38図）。検討の余地は多いものであろうが、ここでの提示が基礎資料になればと考えている。

今回の調査で検出した弥生時代後期の堅穴建物や周溝墓と想定する溝は周辺の居住域、墓域の在り方を考える上で重要にならう。都賀川流域、南に近接する都賀遺跡、北側の丘陵上に立地する伯母野山遺跡の様相を概観しておきたいと思う。

都賀遺跡では中期段階に方形周溝墓群が形成され、現在12基が確認されている。その後も後期～終末期、古墳時代前期にかけての堅穴建物などが検出される。中期の方形周溝墓、その造墓活動は、資料整理が行われ報告書が刊行された第1次調査検出の4基はⅢ期とされている。その他の調査については詳細な整理が進んでいないが、調査時の所見、概要報告からは墓域の形成はⅣ期と考えられる。造営集団の居住域は都賀遺跡では未確認で、北側の篠原遺跡でも同時期の遺構・遺物の出土はわずかである。10数基を擁する墓群の造営集団の居住域とは見なし難い状況である。



第38図 都賀遺跡方形周溝墓・堅穴建物検出状況 (Scale 1:5,000)

都賀遺跡に方形周溝墓が形成されるこの時期、流域では北側丘陵上に立地する伯母野山遺跡での集落形成が活発である。六甲山南麓では中期前半から高地性集落の形成がはじまり、中期後半に盛行、後期前半にはほとんどが姿を消していく。神戸市域東部から西宮市にかけての範囲で多くの高地性集落の存在が知られ、青銅器出土遺跡が同範囲に集中することも特徴である。神戸市域の高地性集落については早くからの市街地化に伴う造成により詳細な調査が行われることが少なかったが、伯母野山遺跡に関しては古くに精力的な表探活動とともに小規模な発掘調査が行われた。それらの資料の一部は神戸市立博物館に寄贈され、近年、再整理が行われて伯母野山遺跡についての評価がなされた。

伯母野山遺跡は篠原遺跡の北側の標高150～180mの丘陵上に立地しており、篠原遺跡の北側で、最初に土器が採集された丘陵裾部に位置する祇園神社と丘陵上では比高差40mほどを測る。古くは牛小屋山、勝岡山、その背後に伯母野山があり、広大な範囲から土器が採集されている。

伯母野山遺跡について特筆されるのは特異な出土遺物である。板状鉄斧や鉄鏃などの鉄製品、朱生産に関わる石杵、また分銅と考えられる石製品が出土しており、これは都賀川流域の遺跡の在り方だけでなく、六甲山南麓の遺跡の中でも特異性と優位性を持つものである。他地域、河内地方や瀬戸内地方からの搬入土器と考えられる土器も確認されており、六甲山南麓の高地性集落で様相が明らかでない遺跡が多い中、地域交流の役割を担う重要な遺跡であったと評価されるものである。

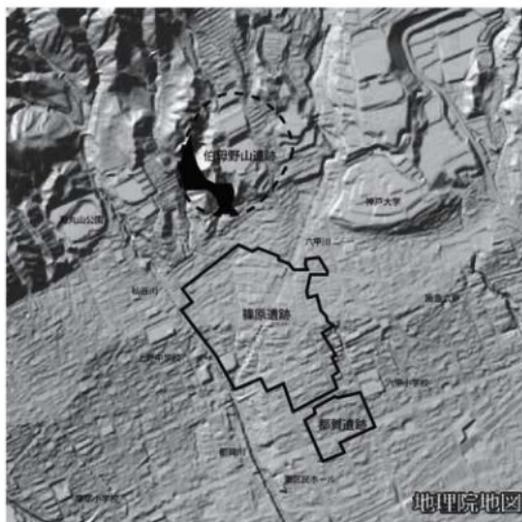


第12次調査 小型仿製鏡(乳文鏡)



第40次調査 銅鏃と鉄鏃

第39図【写真】
篠原遺跡出土金属器



第40図 都賀川流域遺跡位置図
(Scale: 20,000 国土地理院地図標準地図+陰影図に遺跡範囲を加筆)

高地性集落の形成は、成立時期やその立地状況から“倭国大乱”と合わせて緊張状態のなかで戦乱に伴う集落とする説が長く説かれてきた。伯母野山遺跡では環濠などの防衛施設は見られず、出土遺物も通常の集落出土のものと同差はない。戦時の集落とは捉えられていない。自然災害を避けるためとする考え方もあり、大阪湾を望む良好な眺望は交易の際には重要な要素になり得るか考えられる。

篠原遺跡と近接する遺跡での遺構・遺物の検出状況を見ると、現状では弥生時代中期の集落域は伯母野山遺跡を中心としてこれに比較的標高の高い地区で遺構・遺物が検出される篠原遺跡の北半の範囲に居住域が形成され、墓域が都賀遺跡に位置する可能性が考えられる。伯母野山遺跡と都賀遺跡、高地と低地、距離にして1kmほど離れるが、都賀遺跡は扇状地の先端に位置しており、伯母野山遺跡から南北に続く比較的高位の地の末端に位置している。

弥生時代後期になると六甲山南麓で高地性集落が一様に衰退する傾向が指摘されることと合わせ、伯母野山遺跡での活動も減退し、平地に新たに集落が再編される。篠原遺跡での遺構・遺物の検出もこれに同調するもので、平地部、篠原遺跡のほとんどの範囲に都賀遺跡の範囲を

加えた部分が居住域となる可能性が考えられる。詳細な分析をなし得ていない状況ではあるが、今回の調査成果を受けて概観した篠原遺跡の様相と、都賀川流域の遺跡の盛行期を見た場合にはこのような推移が予測できないかと考えている。後期～終末期とされる堅穴建物などの遺構は篠原遺跡の範囲のほぼ全域で検出され、都賀遺跡では同時期から古墳時代初頭にかけての堅穴建物などが検出されている。

また篠原遺跡の後期の出土遺物の中には伯母野山遺跡の特異性、その要素が引き継がれたと考えられるものがある。伯母野山遺跡の出土遺物では板状鉄斧、鉄鏃などの金属器、朱の生産にかかる石杵、また磨製石剣などが特筆されるとしたが、篠原遺跡でも今回の調査を含め鉄鏃が出土しており、朱の生産や精製にかかる遺物の出土やその痕跡自体は認められないものの、第12次調査出土の小型仿製鏡や第27次調査検出の堅穴建物から出土した土器には朱の付着が認められる。この建物からは淡路型甕が出土しており、今回の調査でも淡路型甕や瀬戸内系、四国系と考えられる土器片の出土が認められる。近年、鉄生産に伴う大規模な集落遺跡や朱の精製遺跡の検出が続く淡路地域、さらには朱生産に伴う遺跡が検出される阿波地方との関連性が考えられている。伯母野山遺跡・篠原遺跡の「朱」や「鉄」の要素は淡路地域を介して流通したものと考えられ、今後はさらに検討が必要になると考えられる。特徴的な出土遺物の観点からも伯母野山遺跡からの系譜が窺えるようであり、さらに今回の調査で銅鏃の新資料が加えられたことで、篠原遺跡では小型仿製鏡に続き、集落内に青銅製品を保有する状況が確認された。拠点集落の要素を補強するものと考えられる。

検出遺構・出土遺物の多寡による各遺跡の盛行期を示す（第5表）。出土遺構・遺物からみた盛行期と居住域の範囲については、おおよそ中期＝伯母野山＋篠原、後期＝篠原＋都賀にあった可能性が考えられる。都賀遺跡のⅢ期の方形周溝墓の造墓集団の居住域や、篠原遺跡に関連する墓の位置や範囲などについては検討が必要であるが、篠原遺跡の調査成果から都賀川流域の遺跡を概観した場合、これまでも関連性は指摘されていたものの、改めて伯母野山遺跡を中心とする北側から篠原遺跡を中心とする南側への推移が想定される。

	前期		中期		後期	終末期	古墳時代前期
	I期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	V期	Ⅵ期	
伯母野山遺跡				—————			
篠原遺跡		-----		—————	—————	-----	
都賀遺跡				—————			

第5表 遺跡消長表

篠原遺跡の様相があまり明確でないと前述した上で推論に終始した。篠原遺跡はもとより、六甲山南麓の各河川流域の遺跡の在り方、集落形成については様々な見解がある。今回の調査成果からの想定として、都賀川流域の遺跡の動向についての予測として記しておきたい。

第3節 最後に

今回の調査では篠原遺跡の様相を考える上で重要な時期である縄文時代晩期、弥生時代後期～終末期、古代末～中世の3時期の遺構・遺物を検出した。篠原遺跡での調査開始からおよそ40年、また40回目の調査を終えた段階でこれまでの篠原遺跡での調査成果を概観し、多分に推測を含みながら都賀川流域の遺跡の推移などについて考えてみた。現状では非常に根拠に乏しいものである。今回の推測の是非について、新たな検討材料が加えられることに期待をするものである。

篠原遺跡での調査は震災復興関連によるものも多く、調査後に十分な整理作業が行えたものはほとんどない。調査成果を一覧化するにあたり、参照した実績報告書、調査時の所見などを再確認したが、時間的、物理的な制約もあり、反映できなかった資料も多い。伯母野山遺跡については神戸市立博物館により再整理が行われ、その評価がなされた。

今回の調査成果により、改めて六甲山南麓の遺跡の在り方を検討する上で都賀川流域の遺跡－篠原遺跡・伯母野山遺跡・都賀遺跡－が非常に興味深いものと考えられる。縄文・弥生時代には広域交流の基点となる要素が見られ、銅鐸・銅戈の大量埋納地や後に海岸部に前は前期古墳が築造される地域である。これまでの調査成果の整理が必要であり、今後の調査の進展を期待したい。

参考文献

篠原遺跡及び周辺遺跡に関するもの

- 池田敏 「神戸市篠原遺跡出土資料について－土器資料にみる特性とその解釈－」
「古墳出現期土器研究第3号」古墳出現期土器研究会2015
- 井上麻子 「都賀遺跡」「伯母野山遺跡」「神戸の弥生遺跡」神戸市教育委員会2016
- 岸本一宏 「兵庫県下の弥生時代「岡薄墓」集成」「ひょうご考古第7号」兵庫考古研究会2001
- 口野博史ほか 「伯母野山遺跡の研究」『研究紀要第21号』神戸市立博物館2005
- 若林泰・斉藤英二 「伯母野山彌生遺跡-神戸市灘区篠原高地性遺跡出土遺物概況-」（神戸市文化財報告6）神戸市教育委員会1963
- 財団法人古代学協会 「神戸市灘区篠原A遺跡I」1984
- 妙見山麓遺跡調査会 「神戸市灘区都賀遺跡I 神前地区の調査（1988年）」1989

高地性集落に関するもの

- 前田佳久 「大阪湾北岸地域の弥生集落－神戸市域を中心にして－」「みづは第35号」大和弥生文化の会2001
- 「六甲山系南麓の弥生遺跡」『神戸の弥生遺跡』神戸市教育委員会2016
- 丸山潔 「集団の形成－六甲山麓地域の弥生集落－」『立命館大学考古学研究会論集』立命館大学考古学研究会論集刊行会2003
- 森岡秀人 「東六甲の高地性集落（上）・（下）」『古代学研究96・97』古代学研究会1981
- 弥生集落研究の新動向（VI）-小特集「兵庫県東南部における集落の様相に寄せて-」
「みづは第35号」大和弥生文化の会2001

金属器に関するもの

- 安藤広道 「弥生・古墳時代の各種青銅器」『考古資料大観』第6巻 小学館2003
- 高田健一 「弥生時代銅鐸の二つの性格とその特質」『考古学研究』第47巻第4号 考古学研究会2001
- 「弥生時代の銅鐸の地域性と変革」『古代武器研究』Vol.3 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室2002

土器に関するもの

- 家根祥多 「篠原式の提唱」『縄紋晩期前業－中業の広域編年』北海道大学文学部1994
- 黒田恭正 「神戸市域（六甲山南麓地域）における弥生時代V様式～布留式並行期の土器様相」
『森南町意識発掘調査報告書-第1・2次調査-』神戸市教育委員会2005
- 篠宮正 「東播磨地域における弥生土器編年」『弥生土器集成と編年-播磨編-』
大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号 大手前大学史学研究所2007
- 神戸市教育委員会 「二乗町遺跡第22次発掘調査報告書」2010

写真図版



1. 調査地遠景（摩耶山物星台より）



2. 調査地遠景（瀧丸山公園より）

カラー写真図版2



1. SB201 調査作業風景（南西から） 作業員のいる位置が柱穴



2. SB201 出土銅鏃



1区第1遺構面全景（南から）

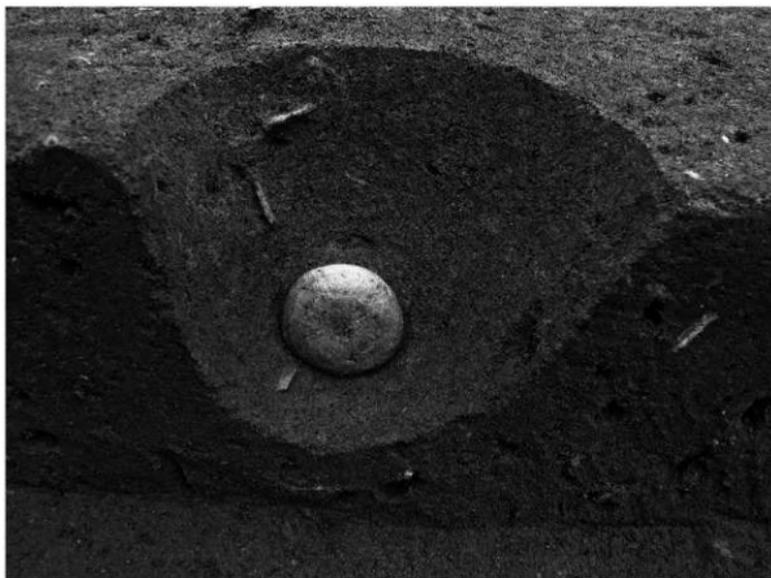
写真図版2



1. 2区第1遺構面北半全景（南西から）



2. SB101 検出状況（南から）



1. SB101-SP101 遺物出土状況（北から）



2. SB101-SP103 土層断面及び遺物出土状況（南から）

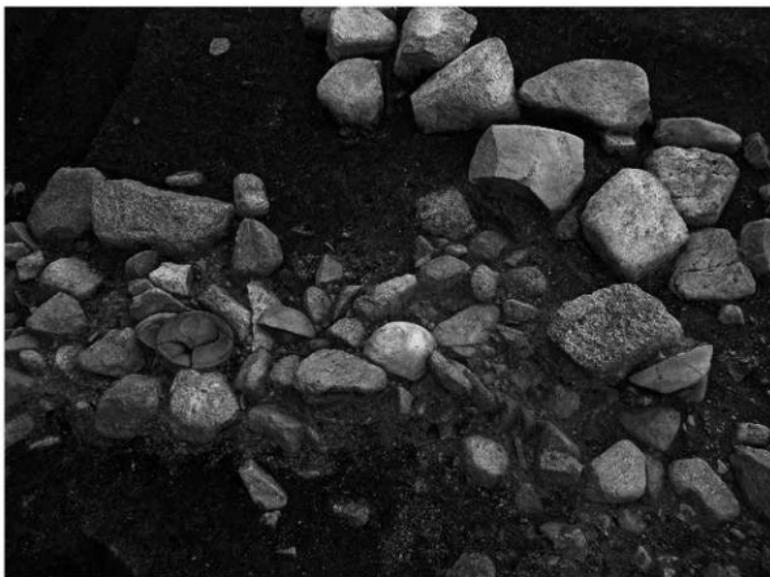
写真図版4



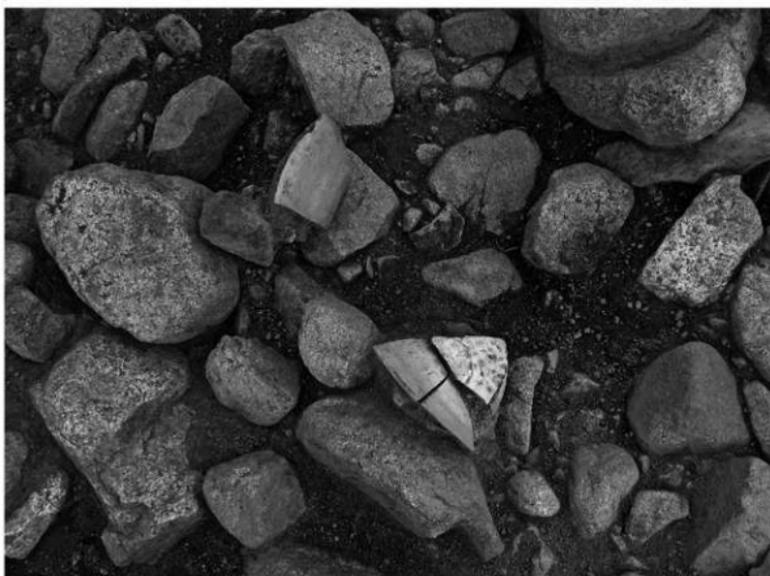
1. SD104及びSX102・104・105全景（西から）



2. SD104及びSX102・104・105全景（東から）



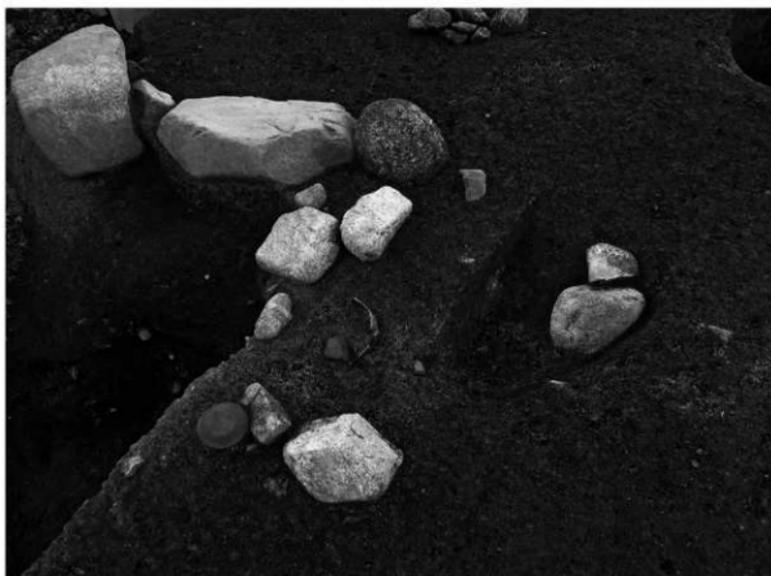
1. SD104 遺物出土状況（南から）



2. SD104 及び SX102 遺物出土状況（南から）



1. SD103土層断面及び遺物出土状況（南から）



2. SD103遺物出土状況（南東から）



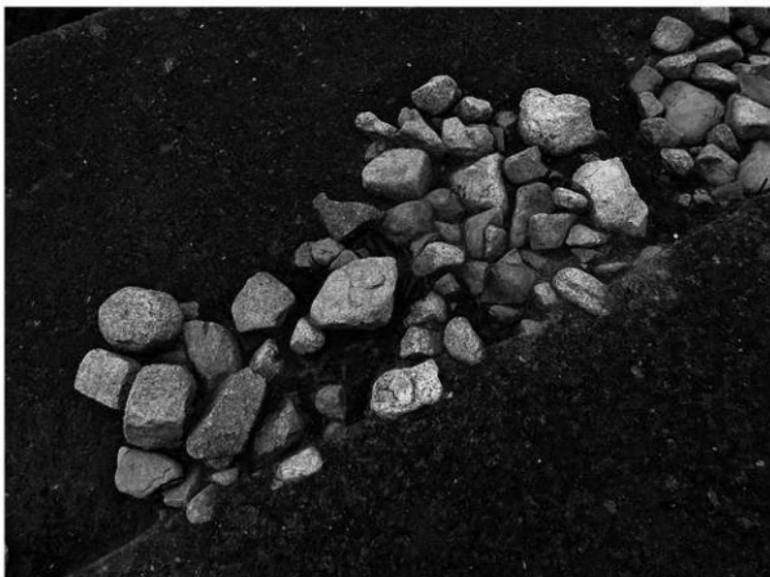
1. SD104 (東) 土層断面及び遺物出土状況 (西から)



2. SD104 (東) 遺物出土状況近景 (南から)



1. SX101 検出状況及び調査区中央土層断面（南西から）



2. SX101-01・02 検出状況（南東から）



1. SX101-03~07全景（北から）



2. SX101-08~10全景（南東から）

1. SK101土層断面
(南から)



2. SX104全景
(南東から)



3. SK104南半全景
(南から)





1区第2遺構面全景（南から）



1. SD201 南辺土層断面 (東から)



2. SD201 南辺中央溝底土坑状部全景 (南西から)



1. SD201 東辺北端部全景 (南から)



2. SX202 全景 (南から)



1. 2区第2遺構面全景（南西から）



2. SB201調査作業風景（南東から）



1. SB201 高床部遺物出土状況（南西から）



2. SB201 埋土上層土器片及び小礫集中部検出状況（南西から）



1. SB201 南西角部遺物出土状況（南東から）



2. SB201 南辺 SX205・SK208 検出状況（北東から）



1. SB201 銅鏃出土状況（北西から）



2. SB201 銅鏃出土状況近景（北西から）



1. SB201-SX203土層断面（東から）



2. SB201下層方形プラン全景（南から）



1. SK202 及び Pit236 全景 (北から)



2. SK205 遺物出土状況 (南東から)



1. SB101 出土遺物



10



3



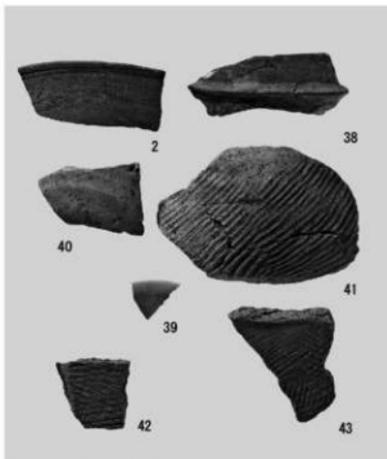
4



7



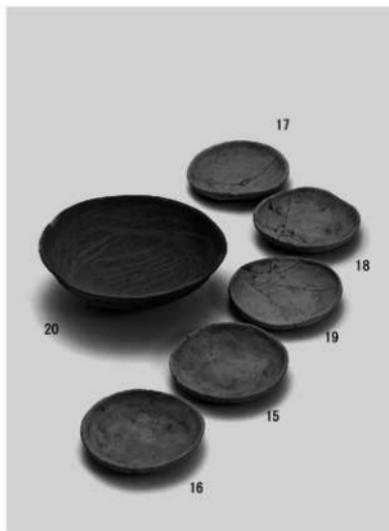
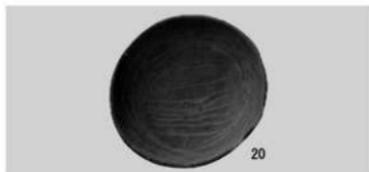
9



2. SB101・SX101 出土遺物



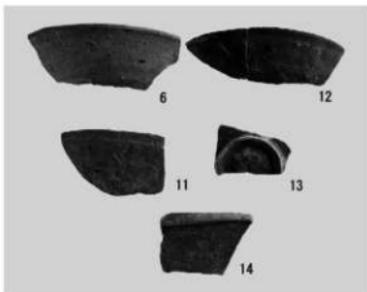
3. SD103 出土遺物



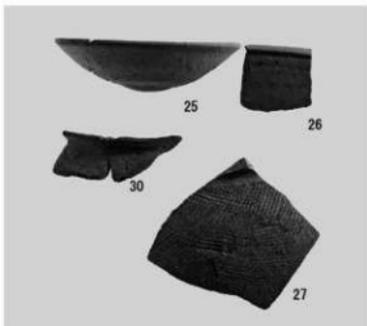
1. SD104 (東) 出土遺物



2. SD104 (西) 出土遺物



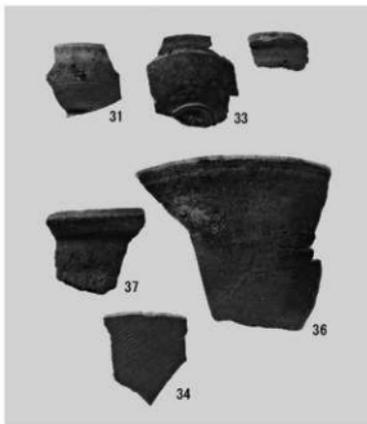
1. SD103 出土遺物



2. SD104 出土遺物

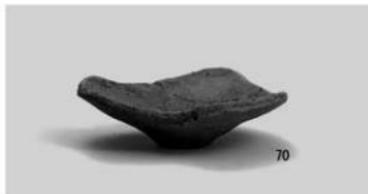


4. SK104 出土遺物

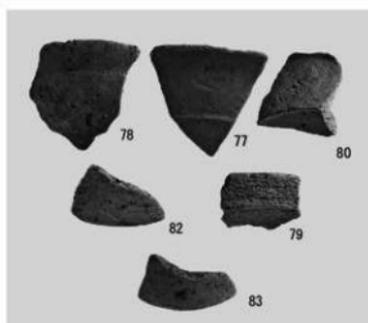
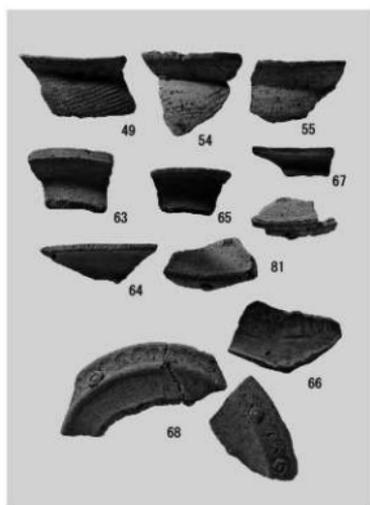


3. SX102・104・105 出土遺物

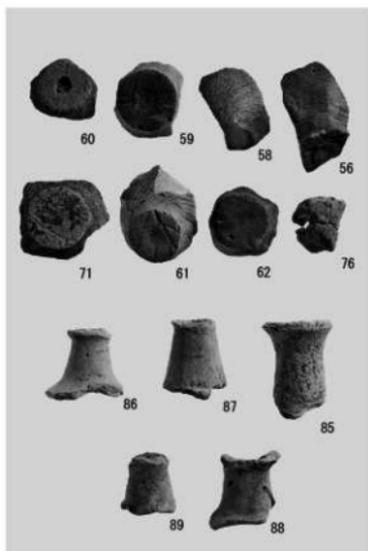




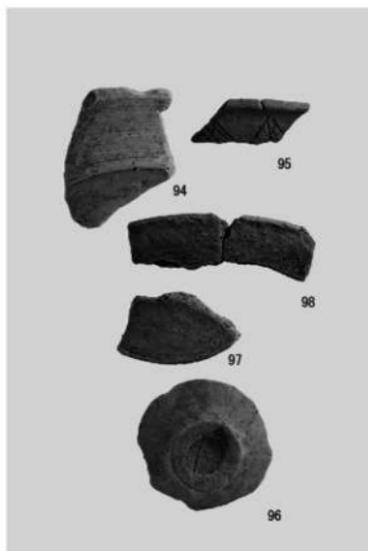
SB201出土遺物(1)



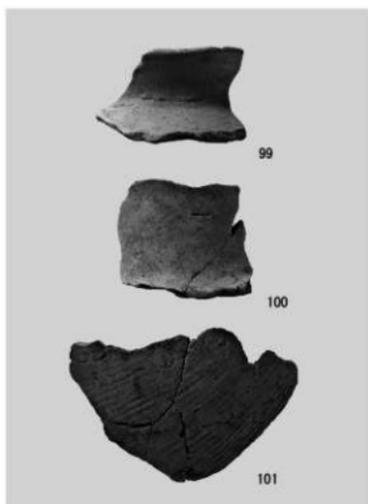
SB201出土遺物（2）



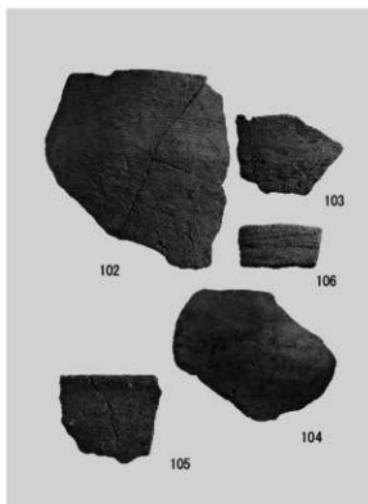
1. SB201 出土遺物 (3)



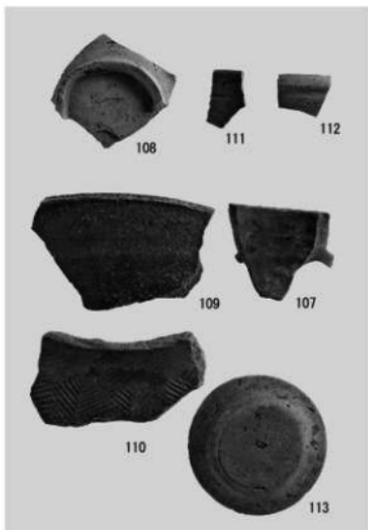
2. SD201 出土遺物



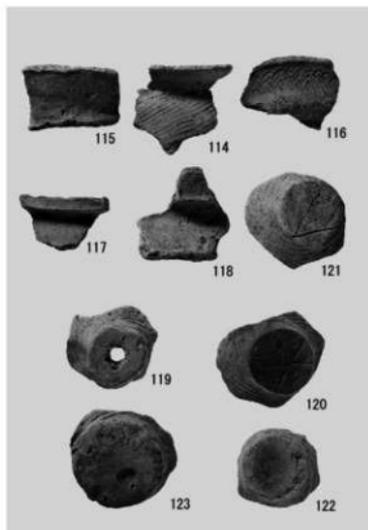
3. SK202 出土遺物



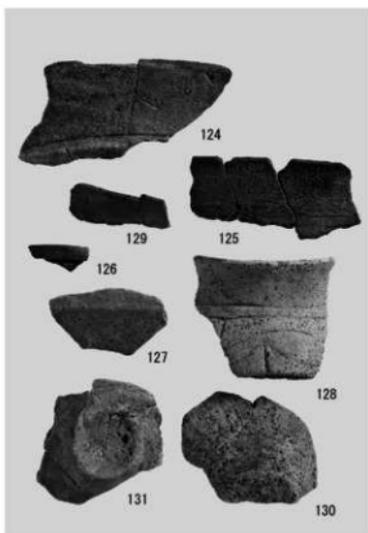
4. SK205 出土遺物



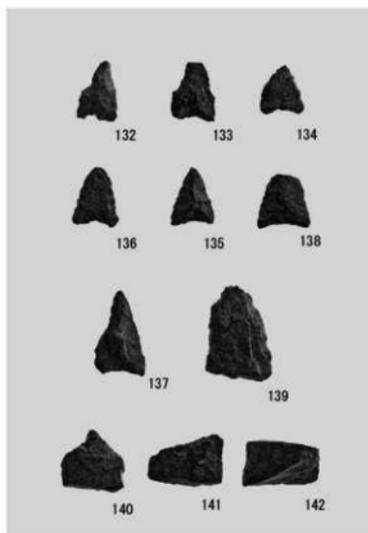
1. その他の出土遺物 (古代～中世)



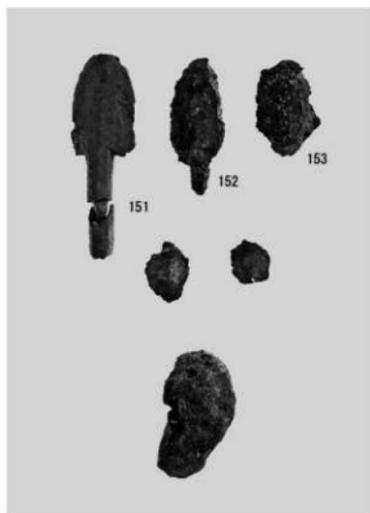
2. その他の出土遺物 (弥生時代)



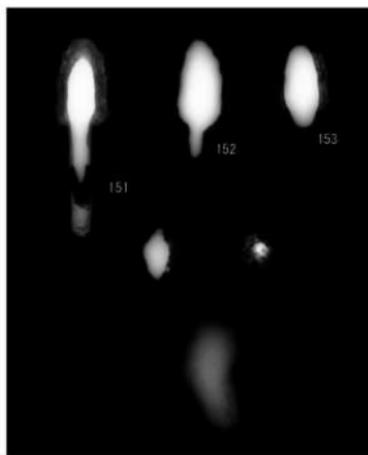
3. その他の出土遺物 (縄文時代)



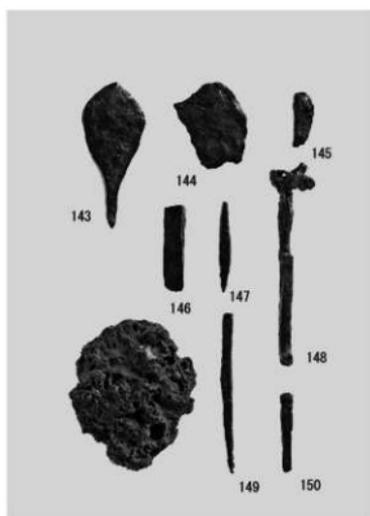
4. 出土石器



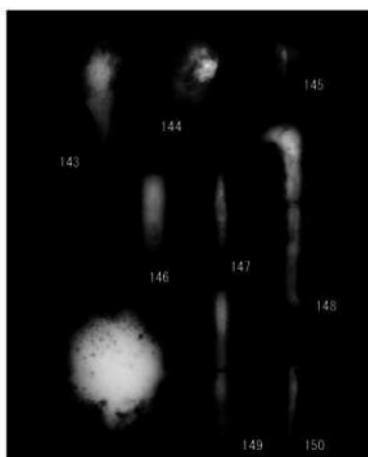
1. 出土銅製品



2. 同X線写真



3. 出土鉄製品



4. 同X線写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	しのはらいせき だい40じ はくつちょうさほうこくしょ							
書 名	篠原遺跡 第40次 発掘調査報告書							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	藤井太郎 (編)							
編集機関	神戸市文化スポーツ局							
発行機関	神戸市							
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-5799							
発行年	西暦2021年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
篠原遺跡	兵庫県神戸市 灘区篠原南町 3丁目	28105	35	34° 43' 3"	135° 13' 48"	20191024 ～ 20191227	270㎡ (の<810㎡)	記録調査 保存
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
篠原遺跡	集落跡	縄文時代晩期 弥生時代後期 平安時代末 中世	土坑 竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物・溝・集石 ピット・集石群		縄文土器 弥生土器 石罫・石斧・石棒 須恵器・土師器・瓦器 陶器・鉄製品・銅製品		銅罫	
要 約	<p>縄文時代晩期、弥生時代後期～終末期、古代末～中世の3時代の遺構・遺物を検出した。弥生時代後期の竪穴建物を1棟検出し、建物から銅罫3点が出土した。弥生時代後期の同一竪穴建物からの銅罫の複数出土は市内で3例目となる。近接して方形周溝墓の可能性のある溝を検出した。詳細な時期は不明である。建物の検出と溝が墓であれば、付近が居住域、墓域として利用されていた土地利用の変遷や在り方を考える上で重要な資料である。</p> <p>平安時代末～鎌倉時代初頭の掘立柱建物1棟と宅地を区画する溝を検出した。溝には土器の投棄や石の集積の様子が確認された。建物廃絶後は居住域の縁辺部となり、中世後半段階の集石遺構を検出し、石の投棄や集積行為が繰り返し行われたと推測される。</p>							

篠原遺跡 第40次発掘調査報告書

2021.3.31

発 行 神戸市文化スポーツ局文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印 刷 福田印刷工業株式会社
神戸市東灘区魚崎西町4-6-3
TEL 078-811-3131

